

# The Journal of True Care

2011  
冬号  
Winter  
【Vol.7】



株式会社創心會® 機関誌  
2011年冬号 Vol.7

## 「今、私たちが思うこと」

- ・ 認知症プロジェクト……………13
- ・ 感動体験「心のバトン」……………17
- ・ 提言 心こそ大切なれ……………19
- ・ コラム 河崎のイマジン～「理念力」について考える…22
- ・ 第4回ジャーナル会開催を終えて……………25

# The Journal of True Care

2011  
冬号  
Winter

【Vol.7】

## » INDEX

P02-04	<b>巻頭言 下半期に向けて</b> 代表取締役 二神 雅一
P04	<b>プロGRESS始動</b> NPO 法人設立開設準備室 山田 浩貴
P05-12	<b>今、私たちが思うこと</b> メンタルアティテュードの形成支援～私のこれまでの経験から～ 岡山地域リハビリケアセンター リハビリ倶楽部築港 管理者 介護福祉士 小林 正幸 訪問看護 72 利用における介護保険負担額の一年後の変化 創心会訪問看護ステーション 作業療法士 岩井 宏明 アセスメントにおける情報収集の技法 本部センター 居宅介護支援センター倉敷 介護支援専門員 佐藤 健志 心創りに関して～在宅の経験を通して～ 岡山地域リハビリケアセンター センター長 理学療法士 山西 孝彦
P13-14	<b>認知症プロジェクト</b> 認知症の方は何を私たちに求めているのか 創心会訪問看護ステーション エリアリーダー 作業療法士 吉中 京子 インタビュー 認知症実践リーダー研修について～講義・利用者体験をふりかえって～ 本部センター グループホーム心から 部門長 介護福祉士 山本 光紀
P15-16	<b>私たちのサービスとは～ FIM を通して～</b> FIM の得点と QOL の関連性について 創心会訪問看護ステーション エリアリーダー 理学療法士 仲野 真治
P17-18	<b>感動体験 「心のバトン」</b> 帯江センター リハビリ倶楽部帯江 管理者 社会福祉士 横田 昭彦 琴浦センター リハビリ倶楽部琴浦 フロアリーダー 社会福祉主事 中村 理恵
P19-21	<b>提言 心こそ大切なれ</b> 本部センター 生活環境プランニング 部門長 福祉用具専門相談員 原田 薫
P22-23	<b>コラム 河崎のイマジン～「理念力」について考える</b> 益野センター リハビリ倶楽部益野 ブロック長 益野センター センター長 兼 リハビリ倶楽部 管理者 介護福祉士 河崎 崇史
P24-25	<b>センターの取り組み 『児島センター第4回望年会開催』</b> 児島センター リハビリ倶楽部児島 フロアリーダー 介護福祉士 荻野 由紀子
P25-26	<b>ジャーナル会 第4回ジャーナル会開催を終えて</b> ～ジャーナル会発足から1年が経ち～ 本部センター グループホーム心から 千葉 好浩
P27	<b>夢のみずうみ村～藤原 茂氏 特別研修会開催～</b>
P28	<b>ニュース 岡山地域リハビリケアセンター 『きらり祭』 トピックス 編集後記</b>

## 巻頭言

# 下半期に向けて

代表取締役 二神 雅一

早いもので15期も半分以上経過しました。今期の基本方針の柱は「顧客第一主義～徹底した利用者志向～」です。皆さん成果は上がっていますでしょうか。今回は経営方針発表会でお話しした内容をもう一度振り返りながら復習し、下半期に向けての言葉とさせていただきます。



### ● 利用者志向とは

志向するとはどういう意味でしょうか。字を見てみると、<sup>さむらい</sup>士の心を向けると書きます。士というのは我々自身を表します。そして、<sup>さむらいぎょう</sup>士業とは<sup>ししぎょう</sup>士師業（あるいは師士業）と言われ、高度な専門性を持ち対象者の生命・身体・精神・生活に直接関わる者であり、職業であるとされています。ですから志向とは、専門職としての心（士の魂）を利用者に向けるという意味ではないかと思えます。それはまさに命がけで臨む仕事と言えるでしょう。それだけの価値とやりがいと満ちた仕事であり、その責任もあります。士業の責任を果たしていくためには、士業としての自覚とプライドが求められます。プライドがあれば、心や技を磨かずに居られません。命がけというのは少々オーバーに思うかもしれませんが、我々の関わり方一つで、利用者のその後の生活や人生にまでも影響を及ぼすことを考えると、決してオーバーとは言えないのではないのでしょうか。要はそのような覚悟を持って臨まなければならない仕事だと思っております。

この命がけという言葉は、現在ではなかなかイメージがつきにくいものとなっていますが、簡単に言ってしまうと、「親身になって対応する」ということです。親の身になって対応しようということ。「親の身になる」とは、自分のことや家族を想うような気持ちを持ちながら対応するということです。最近はこのような「命がけ」で士師業に従事する人が減っているといわれています。私自身もそのような社会的風潮を感じますし、案じています。例えば、目を見ないで話をしたり、納得できる説

明ができなかつたり、真剣味が伝わらない態度で接したりといった具合です。このような士業としてのプライドに欠けた対応を見ますと、「もっと自覚を持とう！」と言いたくなります。また、士業にとって最も大事なことは、「決してどんなことがあっても利用者を不安がらせてはならない」ということです。専門的知識を使って利用者を不安がらせていたのでは士業失格です。これは知識・技術以前の問題です。顧客第一主義のもっとも肝心な部分は、専門職の立場で専門性を振りかざすのではなく、利用者の立場に立ち、利用者を志向しながら専門性を発揮することなのです。士業には知識・技術の前に士業としての精神である「理念」が必要なのです。

### ● 創心流リハケア専門士として理念を実現すること

「創心會のスタッフは全員がリハケアチームの一員である」これは私が良く言うフレーズなので、おそらく多くの方がご存知のはずです。創心會の中でサービスに従事する人を創心流リハケア専門士とするならば、その専門士としての魂は創心會の理念ということになるのではないのでしょうか。ここで、経営方針発表会でお見せしたスライドを図1に示しますので、創心會における利用者志向とは何かを今一度確認してみてください。そして、皆さんも更に掘り下げて考え抜いていただきたいと思います。

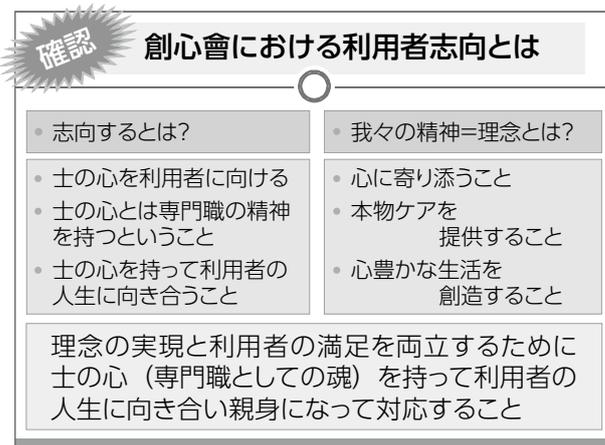


図1

## ● 心に寄り添う心とは専門士としての力である

さて、利用者の立場に立つためには健全な共感的態度で接することが必要です。そのためには心に寄り添う心を持たなければなりません。心に寄り添う心というのは我々専門士としての力です。この力は次のように表すことができます。

専門士として心に寄り添う心(力) = 他者行動感受能力 + 主体変容能力 + 専門的理解力

この意味をしっかりと理解していただきたいと思います。

経営方針発表会では、顧客第一主義の具体的な取り組みとして、利用者のパーソナル部分にアプローチしよう、そのためにパーソナルな情報を集めようと提言しました。こうした取り組みを成功させるには、好意的態度で接することが大事であるとも述べました。我々が持つべきスキルとして「主体変容能力」を挙げていますが、この主体変容能力こそ好意的態度で接することができる能力を意味します。好意的態度で接すれば、好意の返報性によってパーソナル情報が入ってくるようになるのです。

ここで、確認しておきたいのは、パーソナルな情報を取得する際に、情報収集のためだけのアプローチになっていないかということです。主体変容能力は他者行動への感受性があって初めて成立するものです。好意的態度も相手の状態を理解したうえでの好意的態度でなければなりません。自他共に強み・弱み・好み・生活感・人生観・世界観・パラダイムなどを知り、利用者とは健全な一体感を持つことによって、本来必要とされる本物のパーソナルな情報が入手できるのではないかと思います。本当に必要な本物の情報は、取りに行くだけでは手に入らないものです。ただパーソナルな情報を取得するためだけの行為は、その目的はともかくとして、行為自体は奪っているだけにしか過ぎません。そうではなく、相手から積極的に発信してもらえるような働きかけが大事なのです。それはOne-way communicationでは成立しません。Two-way communicationによって初めて成立するものだと思います。ここで恋愛論を展開するつもりはないのですが、例えば、相手のことが好きになったら、相手のことを知りたいと思いますし自分のことも知ってもらいたいと思いますね。一方的に相手の情報を取りに行くのはストーカー的でありますし、また「自分は～」「自分は～」と一方的に発信する人は、いかにも利己的過ぎに思えます。恋愛でも大事なのは双方向の関係性ではないでしょうか。

そもそも私達は、ご利用様の心豊かな生活を創造することを理念に謳っています。その実現のためにパーソナルな情報が欲しいんだということを、真剣な想いで、専門士としてのプライドを持ってぶつけてみましょう。利用者から発信してもらえるような関係を構築し、利用

者の「心豊かな生活」について、もっともっと感度を上げ、そして本物の情報をキャッチできる能力を身につけるよう努力を重ねていただきたいと思います。

## ● 顧客満足度を高めるために

顧客第一主義を具体的な形に表せば、顧客の満足度は上がるはずですが、顧客の満足度を高めるためには、顧客の期待を上回るサービスを提供しなければなりません。それだけの専門技術も必要になります。我々自身が専門士としての器量を高めなければならないのです。我々は常に試されているということを実感しなければなりません。利用者は自身の大切な生活や人生を我々に預けてもよいのか確認しています。我々はそれに応えられる専門士を目指しましょう。

そこで人生を預けていただけるような器量を持つために、いくつかの投げかけをしたいと思います。

- ・利用者を不安にさせない＝安心していただくためにはどうすればよいでしょう？
- ・利用者に納得していただけるような説明をするためにはどうすればいいでしょう？
- ・利用者が満足感を得る為の専門性とはどのようなものでしょう？
- ・その専門性を身に着けるためにはどうすればよいでしょう？
- ・あなたの事業所は、あなた自身やあなたの身内の方がサービスを必要とされた場合、自信を持って紹介することができますか？
- ・自分が利用する立場になって満足できるサービスをあなた自身が提供できていますか？

いかがでしょうか。これらを（これだけではなく）ひとつひとつ実現していく為の具体的方法論を見つけていかなければなりません。専門職として最も実力をつける方法は実体験を積むことですが、どのように実体験を積むかが重要になります。単に経験を重ねるだけではなく、一つひとつの経験を意味のあるものにする為に、各自自身がそれぞれの課題を明確にして取り組むべきです。また、弊社のように若いスタッフが多い場合、その絶対的な経験不足を補う為の方法論としては、創心流のリハケア理論の理解を徹底的に深めておくということです。基礎理論を正しく理解しておけば、ある程度の経験不足は補えます。また、基礎理論を理解して臨む場合とそうでない場合では、経験を意味あるものにするかしないかの違いとなり、同様の経験でも実力のつき方がまるで違ってきます。それは加速度的に大きな差となって表れてくるでしょう。とにかく若いスタッフは特に親身になって利用者との関係を構築し、その中から明らかになった課題に一生懸命取り組む姿勢が大切です。

ここで専門性に謙虚になるということも付け加えておきましょう。弊社の利用者の中には、私が以前担当していた方が現在も何名かがサービスを利用してくださっています。その中のお一人の方から次のようなことをお聞きしました。弊社のスタッフが「自分のリハビリが受けられる人は幸せ者ですね。」といったような言葉を発したそうです。それを聞いて「驕りも甚だしい」と思ったそうです。この発言については、にわかには信じられない話ですが、私とその利用者とのこれまでの信頼関係から、彼が嘘をついているとは思えません。それ以上に創心會の現状を憂いて忠告してくれたものだと感じていますし、そのように受け取られるような発言があったという事実を認識しなければならないと思います。自分の努力の結果に自信を持つことはある意味必要なことです。「自分のリハビリが受けられる人は幸せ者だ」と思えるほど技術を磨き、人間性を磨いて自信をつけていただくことは結構なことかもしれません。しかし、その思いと専門士としてのプライドとは全く異なるものです。しか

もそれを利用者の前で口にするのはいかがなものでしょうか。「驕りも甚だしい」と思われて当然ではないでしょうか。おそらく多くの人が幻滅するに違いありません。専門職は心と技を常に磨く謙虚さがが必要です。むしろ謙虚さの中にこそ本物の専門性が宿ると言って良いのかもしれない。改めて全社員にお願いいたします。今一度、我々の態度、言動、行動、振舞い、そういったことを謙虚な気持ちで振り返っていただけますか。

さて、顧客第一主義の下、「スタッフのこれ一番！」戦略を進行させていると思います。この戦略には、自らの特性を認識し、得意な分野を発掘し、その長所を伸展させる為に「自ら進んで学んで欲しい」という願いもあります。そして本気で仕事に向き合い、提供したサービスが利用者の満足につながることを目指しています。これは「スタッフ一人ひとりが世の為、人の為になる人財化戦略」と言っても良いでしょう。どうか本物の専門士を目指していただきたいものです。今、我々一人一人の実践が問われています。



## プログレス始動

NPO法人設立開設準備室 山田 浩貴

昨年5月より先ずは農業体験をしようということで、無農薬で素人集団による野菜作りから始めてまいりました。その結果、以前ジャーナルでも少し触れましたが介護保険サービスの先にあるものが一筋の光として見えました。あれから4ヶ月の歳月がたち、昨年9月より法人開設準備室という形で新たなスタートを切り、今日に至ります。そもそもなぜこういった事業を始めようとしているのか。今一度振り返りたいと思います。

創心會が予防から終末期までのケアを住み慣れた地域で完結し、ケア革命を起こすことを目標に掲げている企業であることは説明するまでもありません。しかしながら、現場サービスを実践していくにあたり、本当は行動したくてもできないといった現実を、皆様もご経験されていると思います。特に働きたくても働く場所がない、どう働いているのか分からない、就労に向けた訓練を提供できない等、介護保険事業では賄いきれない壁が存在しています。

介護保険を高齢者施策として捉えているのであれば、もう限界があると考えても良いのかもしれない。介護保険制度の設立時と世の流れとが合致しているとは思えないからです。高齢者だから働きたくないのか。障がい者だから納税者にはなれないのか。途中で障害を負ってしまったら働く場所がないのか。そんなはずは決してありません。本来のノーマライゼーションの理念では高齢者も障がい者も子どもも、女性も男性もすべての人々が、人種や年齢、身体的条件に関わりなく、自分らしく生きたいところで生き、したい仕事や社会参加ができる、そうしたチャンスを平等に与えられる。みんなが一緒に暮

らせる社会が“当たり前”としています。

一方、世界的に大規模で起こっている異常気象。それが基で深刻な問題になりかねないのが、我々が生きる為にもっとも必要な食の問題です。そもそも日本は輸入大国といわれ、我々が食するものの半分以上が外国産とも言われるなか、更に深刻な問題になっているのが、農業離れが各地で起こっているということです。高度経済成長期以降、多くの若者が都市へ集中したことにより、農業後継者はおろか、もっとも日本人らしい地域形態も少なくなり、コミュニティというものが崩れていく道へと進んでいます。

こうした、背景を基に我々が次に何をしなければならぬか。ポイントは就労施策、農業、コミュニティの形成ではないでしょうか。これらを理由に別法人を設立し、創心會と連携を図っていくことで、必ずや地域の為、職員の皆様の為、そしてご利用者様の為になるものが出来ると確信しております。

昨年末より正会員の募集等を行い、残すところは設立総会と言いたいところですが、現状は少し足がクモの巣に引っ掛かっている状況です。プログレス（成長、発展）するためには多少の壁はあって当然です。我々も本気で前述したような事項を達成するために日々精進しています。設立時期は現状では未確定ですが、随時進捗はお知らせいたします。

最後にNPO法人の法人名が決定しましたのでお知らせいたします。

“NPO法人 みらいそうぞうしゃ 未来想造舎 わーく 和一久”

意味は、「未来への想いを形にするために和みのある場でいつまでも生き生きと活躍できる会社」となります。

# 今、私たちが思うこと

## メンタルアティテュードの形成支援 「私のこれまでの経験から」

岡山地域リハビリケアセンター  
リハビリ倶楽部築港 管理者  
介護福祉士 小林 正幸

### はじめに

私が創心會に入社して早いもので五年目になります。このジャーナルが発行される頃には次男が誕生して三児（二男一女）の父親になっています。私自身このような節目の



時期にジャーナルの投稿依頼をお受けすることができ、心から嬉しく思っております。また関係者の方に感謝の気持ちで一杯です。ありがとうございます。

### ご利用者様と関わる際の心創り

ご利用者様と向き合う上で、ご利用者様のことを好きになることは医療・福祉業界では基本的な援助技術の考えの一つになっています。なぜご利用者様を好きになると良いサービスを提供することができるのでしょうか。例えばA様のことを苦手に思っただけで対応していると、声かけや介助の際にスタッフがご利用者様を苦手に思っている雰囲気ダイレクトに伝わってしまいます。また観察しなければならぬ状態を見落としてしまい、ご利用者様の变化にも気がつくことができないことが予測できます。まさに負の連鎖とっていいでしょう。しかしながら、もしもA様の事を好きであるという視点で接していたらどうでしょうか。

A様の体調はどうだろうか、どんなことを喜んでくれるだろうか、どんなことでモチベーションを上げてくれるだろうかなど、誰もが好きな人の為であれば、真剣に

考え行動することができるはずで、それでもやはり人間ですから全ての人を好きになり、好意をもって接することは不可能なのかもしれません。そこで、専門職の誰もが自己分析をして長所・短所・思考などの傾向を知り、主体変容を行い、時には虚実皮膜の演技での対応を行っています。それでも、私の持論としては、経験とスキルをつめばどんな人でも好きになれると信じています。また専門職としては、どのような方にも対応できる、心の引き出しを持たなければならないと思います。

### ご利用者様やスタッフとの出会い

哲学的なお話しになりますが、私達はこの地球上に生まれ、多くの国々がある中で、日本の岡山県という土地で出会い、同じ時間を共有しているわけです。この出会いというものを統計学的な根拠で考えると、まさに「奇跡的な出会い」であるといっているでしょう。私は日々この奇跡を認識するように心がけています。その為、私自身は特にご利用者様やスタッフと初対面でお話しをする際には縁を感じながら、この奇跡的な出会いに感謝して関わらせていただいています。

しかしながら、入社して一年目の私は未熟者であった為、日々の業務を行う中で、出会いに対する感謝や共に過ごす時間の重要性を意識せずに、何気なく働いていたように思います。そんな時にご利用者様のK様にお会いして私の価値観は大きく変化しました。

K様は50歳代と若い女性のご利用者様で、脳梗塞の後遺症で左半身麻痺のあるご利用者様でした。歩行レベルはスタッフの歩行介助により10メートル程は安定して歩行ができる方でした。K様は運動をするのがあまり好きではない方でしたが、それでも私とのパーソナルな相性は良く、「時間ができたら歩行訓練をしよう！！」といつもK様から私に声をかけて下さっていました。それでもK様は高血圧症もあり、血圧が200近い数値でしたので、血圧や体調を看護師やリハビリスタッフに確認しながら、歩行訓練や個別メニューを実施していました。

3ヶ月が経過してK様と歩行訓練を10分行うことが私

とK様の日課になり始めました。時間を調整できれば、K様と水島の広いフロアを歩き合間に休憩してコミュニケーションをとることは私自身も楽しいルーチンワークになっていました。そして、ある日の午後「今日も歩行訓練をしよう!!」とK様からお声かけして下さったのですが、たまたま外に出る用事があり「すみません。Kさんの次の利用日に歩行訓練をしましょう!!」と私はシフトを確認せずにお約束をしました。後で確認すると、K様の次回の利用日は私の休みの日でした。内心ではしまったと思いました。その次の利用日に謝罪して歩行訓練をすれば問題ないと簡単に考えていました。次の利用日にK様はあるスタッフに「今日、歩行訓練の約束をしとったけど、休みだから残念だね。」と話されていたそうです。その数日後、K様は脳梗塞の再発により、お亡くなりになりました。

私は入社してご利用者様との初めてのお別れでした。別れはいつかると理解しているつもりでしたが、初めての別れがこれほど後悔する別れになってしまうとは思っていませんでした。もっと普段から真剣に人には出会いと別れがあることを意識して、出会っている瞬間に、今できる最高のケアや、お声掛けをおこなうことが必要でした。心の整理がつかないまま、初めて告別式にも参加させていただいたのですが、頭の中では、なぜ最後の利用日に歩行訓練ができず、さらに安易なお声掛けをしてしまったのだろうと、自分を責めるばかりでした。さらに数日が経過して、K様のご家族にご挨拶をさせていただこうとご訪問させていただき、ご主人とお話しをさせていただきました。K様は歩行訓練、入浴、普段の何気ない会話が大好きだったので、いつもご主人にデイの出来事を話されていたそうです。楽しそうに話されるK様を見てご主人はすごく嬉しかったと話されていました。何気ない会話の内容もほとんど私がお迎えやお送りした際に話した内容でした。私はK様のお写真に手を合わせ、「最後に歩行訓練ができず大変申し訳ありませんでした。Kさんと出会って学ばせていただいたことを、必ず他のご利用者様へのサービスとして実践させていただきます。」と誓わせていただきました。ご利用者様のお写真に手を合わせて泣いたのは、その日が最初で最後でした。その後、私は出会いと別れを意識して、今出来る最高のサービスやお声掛けができるように、ご利用者様と関わりをもたせていただいています。

## ● ご利用者様の主体性

ご利用者様と接する中で「やる気」になっていただく為に、ご利用者様のパーソナルな情報を収集することは大切になってきますが、個人で訓練を行うよりも、集団

で一つの目標に向かって何かを取り組むことは、健康面やモチベーションにも大きな効果があると考えられています。その具体的な取り組み例としてリハビリ倶楽部築港(岡山センター)の文化祭行事『きらり祭』があります。通常の福祉施設での文化祭やお祭りではスタッフが構成プログラムを考えますが、『きらり祭』は違います。ご利用者様が中心となって考える文化祭行事なのです。

『きらり祭』(第六回)は今年も11月に盛大に開催いたしました。主な目的としては、ご利用者様に主体性をもっていただけるように、特性に応じた役割についていただきます。またピアグループの形成支援を行える様に、グループ構成をスタッフとご利用者様で検討し決定していきます。さらに普段の訓練メニューや、アクトの時間に制作した作品を展示してご家族、ケアマネジャー、地域の方々に見ていただきます。またご利用者様が中心となり、『おもてなしの心』でプログラムやフロアの空間演出、発表等の構成も考えます。まさにご利用者様が主役の文化祭行事なのです。

また『きらり祭』の素晴らしい所は、ご利用者様のモチベーションが上がり、気持ちに大きく影響があるところです。具体的な例としては、本番に近づくにつれて、ご利用者様のお休みが少なくなってきます。(キャンセル率低下)これはご利用者様お一人おひとりが、役割に責任をもたれ『きらり祭』を成功させようという強い気持ちが影響していると考えられます。また普段は集団でのメニューに参加されないご利用者様が、『きらり祭』の脳トレ発表担当の為に、積極的に参加され意見や提案を挙げられます。さらにマシン説明の担当のご利用者様は、長い原稿を暗記するぐらいまで読み込まれてきます。本当に準備段階からご利用者様とスタッフが、共に感動しながら取り組ませていただいています。『きらり祭』をヒントに、ご利用者様が中心となって取り組むことのできる訓練メニューや効果的な行事を今後も考えていき、集団での『心創り』を実践できればと考えています。

## ● 今後の自立支援の在り方

ご利用者様のモチベーションが上がり、訓練の成果が出て、ADLがアップしていざ職場復帰を考えても、現在の社会では対応できる職場環境が少なく、大きな壁にぶつかってしまい‘獲得された無力感’を感じてしまうケースが多くある様に思います。やはりケア革命を考える上で障害を持たれた方がいきいきと働ける職場や環境を社会に提案しなければならないと思います。

障害をもたれた方の特性を活かして就労していただくことは、お金を得るだけの満足感だけではなく、就労の喜びや厳しいリハビリを乗り越えた人にしかわからない

特別な意味をなしていると思います。障害を持たれている方だけがチャレンジするのではなく、社会や企業もチャレンジする気持ちが必要ではないでしょうか。障害をもたれている方を雇用されているある会社の方が言われていました。「障害をもたれている方が働きたいと思って仕事に就かれることが最大の自立である。」

私達はご利用者の目標やニーズに合わせてさらにス

タッフ個人の専門性を高め、チームで様々なことにチャレンジしていくことが必要であると思います。そして様々なご利用者の生きがいや希望を提供し続けることが使命であると思います。またNPOでの就労支援活動が障害を持たれた方の社会への架け橋になると思いますので、是非ともスタッフの皆様にもご協力を宜しくお願い致します。

## 訪問看護72利用における介護保険負担額の一年後の変化

創心会訪問看護ステーション

作業療法士 岩井 宏明

### まえがき

2012年の医療・介護同時改正に向けてこの業界におけるニュースも比較的耳にする機会が多くなった。「軽度の利用者様には利用制限をつけ



る」「高所得者は二割負担になる」といった議題も挙がっている。保険料の変化も議題の一つであり、年々引き上げられている保険料についても、今回どうなるのかは当事者でなくても注目されているところである。

改正に向けての議論を聞きながら、その社会制度に身をおいている人間の一人として、リハビリテーション前置という考え方は果たしてどういった社会的意義を持つのかを、一年前の利用料と比較・検討したい。

### 目的・背景

先述した保険料の問題であるが、リハビリ分野においても例外にもれず、医療保険も含めた利用料についても見直しの対象となっているようである。中にはそういった観点から、「漫然とリハビリを継続している」「リハビリは不要」といった否定的な考えを持たれる方もいらっしゃるようである。

その背景は、対価に見合うだけのパフォーマンスが提供されていないのではないかと考えた考え方である。実際に単価が高いという理由だけで利用を見合わせているケースもいるくらいである。

介護保険開始当初は300万人に満たなかったが、少しずつ増えてきた介護保険受給者は、今年には介護保険利用者数も410万人を超えており（図1）、一人当たりの平均利用額も18万円強と1人あたりの利用単価も高い。

こういった社会背景の中で、果たしてリハビリとはコストパフォーマンスが低いのかどうか、一年での利用料金の変化を基に考察することが目的である。もし効果を感じられるとすれば、介護負担の軽減とともにリハビリテーション以外での利用料金が低くなるのではないかとこの仮説を立て、一年での利用料の変化を見た。

### 方法・理論

提供表ベースで、平成22年12月と平成22年1月の同様の項目を検討し、その数値変化を比較検討する。検討する内容は

①訪問看護72の利用額

②訪問看護72以外の利用額

の2点である。この数値の平均を比較する。今回は特に②の訪問看護72以外の利用額について注目する。

対象者は、要介護認定を受けている創心会訪問看護ステーションを利用者様で、平成22年1月から平成22年12月の一年間継続利用されている方15名を無作為に抽出する。抽出した結果、平均年齢73.3歳、男性7名女性8名の内訳であった。

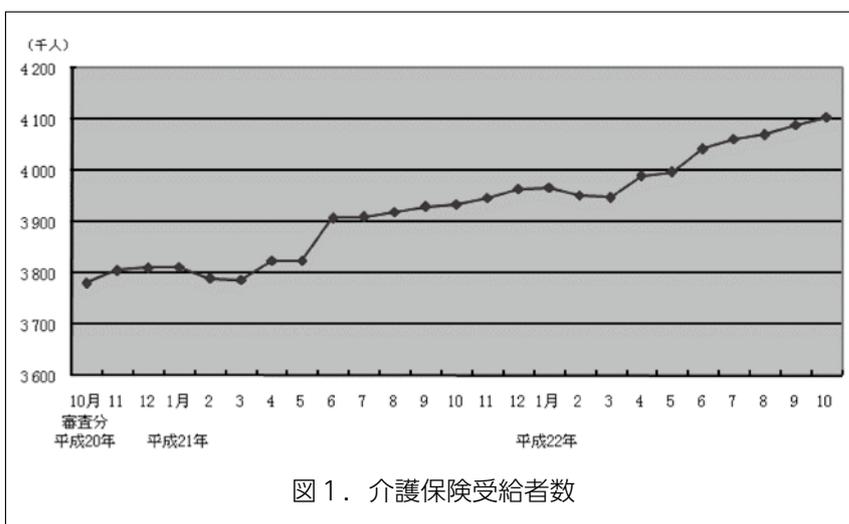


図1. 介護保険受給者数

## 結果

15名のうち、介護保険料が変化しなかった方が3名、減少した方が9名、増加した方が3名となっていた。

15名で数値をみたところ、訪問看護72で332円の上昇、訪問看護72以外での自己負担額の変化は平均値に関して6円の上昇、中央値では変化なしとなっている。

保険料が減少した9名方については、訪問看護72で461円の上昇、平均値で767円の減少、中央値で1,220円の減少となっている。

### 訪問看護72以外での変化

15名全員

	平成22年12月	平成22年12月	差
平均値	7,943	7,937	6
中央値	5,843	5,843	0

減少した9名

	平成22年12月	平成22年12月	差
平均値	7,073	7,840	-767
中央値	3,330	4,550	-1,220

## 考察

今回はデータが少なかった為、参考程度にしていたきたいということはあらかじめ述べさせていただきたい。

さて、今回の結果であるが、平均としても自己負担で6円の上昇と、一年間での利用料金は維持できていることが見られた。また、その中でも自己負担額が減少したケースが9名もあり、自己負担額も767円減少しているといった驚くべき結果となった。

厚生労働省の出している介護給付費実態調査月報では、要介護者一人当たりの平均利用額について、ある一年を見てみた。平均利用額でも約400円の自己負担額の増加が見られている。この平均利用単価については要介護者1～5の方すべて含んでいる数値であり、比較できるものではないが、年々保険料額が上がっていることは、関係職種としては知っておきたいことである。このデータについては単月の平均値であり、継続実施の比較を行っている今回の調査の比較対象が異なるため、どの程度有用に働いているかは示すことが出来なかった。

また、今回の課題としても挙げられるが、介護の分野において考慮する部分が大きく、一部だけ切り取ってもそれは参考にしかならないということがある。今後は

・ 間接的な介護費用

・ 直接的な介護の賃金換算

・ 働いていた方の機会費用の損失

も考慮に入れていかなければならない。

例えば間接的な介護費用などは、おしめを買う・タクシーで薬をもらいに行く・介護用の食品を買う・ガーゼなどを買う、などで、必要なものであり、継続的に費用として使わなければならないものである。

次に直接的な介護の賃金換算であるが、これは、ご家族の行っている介護量を賃金で換算する、といったそのままのものである。もともと介護保険がご家族の介護に頼っている部分もあるため、考慮が必要である。現場で考えるとしたら、実際にご家族の介護負担を軽減することが、コストパフォーマンスを考える点においても有用なのだと考えられる。

最後の機会費用の損失であるが、もともとご利用者が働いていたケースもそうであるが、ご家族が介護のために働けない、また雇用の機会を減らさなければならない、といったことがそれにあたる。障害などがなければ得られていたであろう賃金を損失していることも、目に見えにくいことであるが、意識の片隅に置いておくほうが良い。

## あとがき

一年前との比較について、正常値との比較が行えなかったことは残念であるが、今回改めて変化を見ることによって、リハビリでの関わりの必要性を感じることが出来た。「一年間訪問看護72利用している」という条件の中だけでも、これだけの改善例が見られている内容については検討課題には挙げていなかったためこれも今後の検討課題となることと思われる。

誤解の無いようにお伝えしておきたいのは、「リハビリの効果が高まれば、介護負担が減る」というテーマで、利用料を指標に行っていたが、これは正しいわけではなく、実際には他業種との協力の下にご利用者様、ご家族の負担が減っている個別のケースもいるということである。ケースごとにどこにコストパフォーマンスを見出すかを検討していくのも現場対応における課題のひとつであると思われる。

最後に、協力していただいたすべての方々へ感謝を述べさせていただきたいと思います。ありがとうございます。

## 参考文献

厚生労働省ホームページ

## アセスメントにおける情報収集の技法

本部センター 居宅介護支援センター倉敷 部門長  
介護支援専門員 佐藤 健志

### ○ アセスメントとは何か

本物ケア宣言の中にも、我々は専門的なアセスメントに基づいて、適格なニーズを導き出すことが必要であると述べられているが、皆さんはアセスメントの本来の意味について考えたり、調べたことがあるだろうか。



アセスメントという言葉は辞書で引いてみると、本来は「課税」「査定」「評価価値」「分担金」など幅広い意味を示す言葉であり、ソーシャルワークにおいてはクライアントに関する情報収集と分析、という意味で用いられる。本物ケア宣言の中で用いられるアセスメントの意味も、これに同義である。

介護保険では、ケアマネジャーの役目として、厚生労働大臣が定める23項目の“課題分析標準項目”（表1）に挙げられた項目を、万遍なく収集する事が求められており、その過程をアセスメントと定義する。

実際の支援に際しては、この外にも、収入状況や生活歴などの情報収集が必要となる。家族関係についても、介護力に直結するだけに重要なアセスメント項目である。つまり、課題分析標準項目はあくまで最低限のアセスメントなのであって、ケアマネジャーが集めるべき情報というのは、それ以上に幅が広いもの、ということができるだろう。

この情報収集に際しては、「自由筆記でも構わない」とされているが、介護支援専門員が様々な基礎資格に由来する事を考えると、こうした方法は適切とはいえない。

なぜならば、それぞれの基礎資格や職業経験によって、得意な領域と不得手な領域が存在するためである。得意な分野の情報収集は出来ても、苦手な分野の情報収集がおざなりとなり、隠れたニーズに気付かない、したがって生活状況の改善に繋がらない、という事が起きやすくなってしまおうと考えられるのである。これは、情報収集だけでなく、分析の場面でも同様である。

### ○ アセスメントツールを活かす

こうした問題を解決するためにあるのが、アセスメントツールである。創心会の居宅では“MDS-HC2.0”を使用している。この様式に沿って情報収集することで、万遍なく情報収集ができ、生活課題を引き出すことが出

来る、という事になる。

言い換えてみれば、アセスメントツールとはアセスメントのマニュアルの事であり、極端に言えば「初心者向けの情報収集ツールである」という事もできる。では、アセスメントツールを使ってアセスメントを行えば、全ての課題がはっきりするのか、と言えば、ことはそう単純に運ばない。

MDS-HC2.0のチェック項目は細かい物を含めると200項目以上に上り、一つ一つ全てを聞き取りによって確認しようとする、とすると、相当な時間がかかる。

また、アセスメント項目の中には、聞き取りでは判別が難しい項目や、聞き取りすること自体が適切ではない項目も含まれる。家族関係や介護の負担感、虐待の有無などに関する項目がそれである。

つまりは、それぞれの項目が何の為に設定されているのか、質問の求める意味を理解していなくてはならない。事実を確認する必要がある項目と、状況を見極めてこちらが判断する項目。そうした違いを踏まえて、「最も解決が必要な部分はどこなのか」という優先順位を捉える“眼”を持たなくては、効果的なアセスメントはできない。

言ってみればアセスメントツールとは、ツールという言葉の示すとおり「道具」なのである。その事を理解して、それを上手く使いこなす事が我々には必要とされる。

### ○ 情報収集の段階

そうした事を踏まえて、具体的な情報収集を考える。

情報収集は、面談での聞き取りが主な場となるが、もちろんそれだけではない。ここでは、どの段階でどのように情報を集めるかを、区分して捉える。

- ①相談依頼、受理の段階…基本情報（住所、氏名、電話番号等）、介護保険の申請状況
- ②インテーク…家庭でのADL・IADLの状況、家族状況（生活家族のジェノグラム）、家屋環境、既往・現病歴、服薬、処置の有無、主治医、経済状況 等
- ③2回目以降の面談…生活歴、社会交流、家族関係、特別な状況（虐待、終末期など）等
- ④サービス利用時…サービス担当者のアセスメントとの比較、社会交流の状況、より詳細な生活状況 等

#### 1. 基本情報に関する項目

No.	標準項目名	項目の主な内容（例）
1	基本情報（受付、利用者等基本情報）	居宅サービス計画作成についての利用者受付情報（受付日時、受付対応者、受付方法等）、利用者の基本情報（氏名、性別、住所、電話番号等の連絡先）、利用者以外の家族等の基本情報について記載する項目
2	生活状況	利用者の現在の生活状況、生活歴等について記載する項目

3	利用者の被保険者情報	利用者の被保険者情報（介護保険、医療保険、生活保護、身体障害者手帳の有無等）について記載する項目
4	現在利用しているサービスの状況	介護保険給付の内外を問わず、利用者が現在受けているサービスの状況について記載する項目
5	障害老人の日常生活自立度	障害老人の日常生活自立度について記載する項目
6	痴呆性老人の日常生活自立度	痴呆性老人の日常生活自立度について記載する項目
7	主訴	利用者及びその家族の主訴や要望について記載する項目
8	認定情報	利用者の認定結果（要介護状態区分、審査会の意見、支給限度額等）について記載する項目
9	課題分析（アセスメント）理由	当該課題分析（アセスメント）の理由（初回、定期、退院退所時等）について記載する項目

## 2. 課題分析（アセスメント）に関する項目

No.	標準項目名	項目の主な内容(例)
10	健康状態	利用者の健康状態（既往歴、主傷病、症状、痛み等）について記載する項目
11	ADL	ADL（寝返り、起き上がり、移乗、歩行、着衣、入浴、排泄等）に関する項目
12	IADL	IADL（調理、掃除、買物、金銭管理、服薬状況等）に関する項目
13	認知	日常の意思決定を行うための認知能力の程度に関する項目
14	コミュニケーション能力	意思の伝達、視力、聴力等のコミュニケーションに関する項目
15	社会との関わり	社会との関わり（社会的活動への参加意欲、社会との関わりの変化、喪失感や孤独感等）に関する項目
16	排尿・排便	失禁の状況、排尿排泄後の後始末、コントロール方法、頻度などに関する項目
17	褥瘡・皮膚の問題	褥瘡の程度、皮膚の清潔状況等に関する項目
18	口腔衛生	歯・口腔内の状態や口腔衛生に関する項目
19	食事摂取	食事摂取（栄養、食事回数、水分量等）に関する項目
20	問題行動	問題行動（暴言暴行、徘徊、介護の抵抗、収集癖、火の不始末、不潔行為、異食行動等）に関する項目
21	介護力	利用者の介護力（介護者の有無、介護者の介護意思、介護負担、主な介護者に関する情報等）に関する項目
22	居住環境	住宅改修の必要性、危険個所等の現在の居住環境について記載する項目
23	特別な状況	特別な状況（虐待、ターミナルケア等）に関する項目

### 情報収集の技法

情報収集の相手は、本人、家族との面談による聞き取りと観察が主である。サービス担当者からの情報は、客観的な状況分析が可能であり、その区分ごとに深い考察や観察が行なわれる為、重要度が高い情報と言うことが

できる。

日頃からそうした情報が集まりやすいように、関係者との信頼関係を固くしておく事が、何より重要であると私は考える。情報収集の技法と言えば、面談技法が主題となるように皆様には感じられるであろうが、あらゆる技法は、関わる人々の関係性を高める為の“道具”として使うべきであるという事を、私は基本認識としている。

さて、肝心の情報収集の技法の中身についてであるが、大きく分けると「傾聴の技法」と「質問の技法」に分けることができるだろう。特に質問の技法については、今回のテーマに沿った内容であるため、特にクローズアップして述べる。

質問とは、言ってみれば相手に向けて放つ“矢”である。信頼関係のベースが無くては、「なぜそのような質問に応えなくてならないのか」と反発を受ける場合もある。特に家族史や生育歴などは、信頼関係が整わないと質問できない項目と言える。

一方で、尋ねることを躊躇していたために、支援の方向性が定まらず混乱する場合もあり得る（排泄や経済状況など）。こうした質問は、逆にインテーク面接で質問する方が答え易い。ただし当然の事ながら、聞き方には配慮が必要となる。こうした時は、「業務上必要である旨」を相手にきちんと説明し、答えるか否かも相手が決められるよう、ソフトな形で質問を投げかけるようにする。

質問の方法としては、“閉じられた質問（選択できる質問）”と“開かれた質問”の使い分けが代表的技法といえるが、それらの使い分けの前提には、こうした配慮が必要である。

質問の仕方を一言で言えば、「どういう目的で、どのような聞き方で、何を聞くのか。なぜその情報が必要なのか」という事を明確にした上で質問をする、という事である。

方向性が明確な、良質な問いかけは、アセスメントを通して新たな可能性に気付くきっかけを作る。そうした面談を重ねる事で、利用者理解はさらに深まり、本物ケア実践に近づく事になると、私は信じている。

どこに行こうとしているのか分からなければ、どの道を通ってもどこにも行けない。

ヘンリー・キッシンジャー

（第56代 アメリカ合衆国 国務長官）

### 参考文献

- 1) ケアマネジャーの質問力 高室成幸 2009年
- 2) 社会福祉援助技術論Ⅱ 福祉士要請講座編集委員会 2003年
- 3) 面接技法の総合的考察 榎木満生 2010年
- 4) 逐語で学ぶ21の技法 対人援助の為の相談面接技術 岩間伸之 2008年

## 心創りに関して ～在宅の経験を通して～

岡山地域リハビリケアセンター センター長

理学療法士 山西 孝彦

最初に原稿執筆の依頼を受け、テーマを何にしようか思案していました。私は理学療法士ですが、創心會に入社してからは、「理学療法士」という限定した概念だけではなく、リハビリテーションというもっと大きな概念で物事を考えなくてはならないことを学んできました。なぜなら、「作業療法」「理学療法」「言語療法」「ケア」などはリ・ハビリテーションを達成するための手段であるからです。（詳しくは生活力デザイナー3級序章をご参照下さい）リハビリテーションについて考えるときに重要なこととして、「心」、メンタルアテテュードの形成支援があります。創心會のバイブル本である、太田仁史著の「新・芯から支える」には、メンタルアテテュードの形成支援の障害となる「元気がなくなる理由」が書かれています。この項目は、生活力デザイナー3級の試験項目にもなっている重要な部分です。そこで、「元気がなくなる理由」に関して私なりに体感してきたことを少しでもお伝えできればと思います。



実際に「元気がなくなる理由」に関して経験したことです。リハビリ倶楽部邑久で従事していたとき、ある新規のご利用者様を担当させていただきました。その方をAさんと呼びたいと思います。Aさんは感覚障害が強く、麻痺している部分の痺れ感をしきりに訴えられていました。しかし運動麻痺はあまり強くなく、よく観察しなければ何の病気か分からない状態です。Aさんは周囲のご利用者様から「あなたはどちらかというと障害が軽そうだから良いね」と声をかけられていました。しかし、Aさんにとって、その何気ない言葉はひどく傷つく言葉でした。Aさんは私に「私はあんなことを言われるのが辛い。私の障害は周りからは分かりにくいのかも知れない。でもこの辛さをもっともっと理解してもらいたい」と話されました。そこで私は相談に乗り、家を訪ねて奥様と話をしたり、可能な限り周囲に理解を得られるように働きかけました。しかしAさんの表情は曇ったままでした。あまりにも鬱々とされていたので、心療内科の受診を勧めたところ、うつ病と診断され治療を受けることになりました。Aさんはこの治療によって症状が回復しました。

この事例の分析ですが、周囲に痺れの苦痛を分かってもらえない「孤立・孤独感」、痺れが治るのか、もしくは前向きに向き合っていけるのかの「可能性が分からない」、「障害の悪化や再発の不安」があったように思います。Aさんは目に見える障害が少なく、私も十分な関わりが持てていなかったように感じます。Aさんのケースは目に見える障害よりも、「心」の障害の方が、緊急性も重要性も高いことを勉強させていただいた貴重な経験でした。

先ほどのケースはいくつかの反省や課題を持つことが出来ました。次は成功体験を述べたいと思います。定年退職して間もなく、小脳出血で軽度失調症になられた利用者の体験です。この方をBさんと呼ぶことに致します。Bさんは当初は運動失調があり、屋外歩行は困難な方でした。しかしながら機能訓練等によって、見守り程度で1時間程度の歩行や、畑活動、車の運転等が可能になりました。しかしある時、奥様から次のような言葉を頂きました。「主人は練習で殆どのが出来るようになっていのに、自分からは何もしようとしないので困っています」という内容でした。Bさんは様々なことが出来る能力は増えましたが、自分が何をしたいのかが分からない状態でした。対策として、サービスのほとんどの時間を今後の目標と将来設計を計画する時間に当てました。自分で考えるのが困難な場合は、奥様と一緒に考えていただきました。その際には、極力ご自分から意見を述べて頂くように促しを掛けて行きました。その時に出た意見は、「とにかく孫が好きだ。孫に何かしてやりたい。家内に迷惑はかけられない」という漠然とした内容でした。その後、話を進めるにつれて徐々に具体的な内容が見えるようになってきました。その内容は「孫と遊びたい・・・バーベキューかな?・・・でもバーベキュー用の机の色がはげて来ているし・・・。あと運転が出来るようになったから受診だけでも自分で行けるようにしたい」というものでした。ここまで明確になれば、あとは計画して実行するのみです。ペンキを奥様と買いに行ってください、ペンキを塗り、完成後はお孫さんに連絡してバーベキューの計画を立てて実行していただきました。

Bさんの場合、バーベキューをして、お孫さんと楽しむという目標は達成されました。しかしながら、人生の長い期間の中では、このような一時的な目標だけでは不十分です。新たな目標や、より長期間にわたる目標を持つ必要があります。Bさんには他にも目標や計画を立てて実行し、成功体験を積み重ねて頂きました。最終的には奥様と一緒に目標を設定することが出来るようになったため、サービス終了となりました。Bさんのケースを通して学んだ事は、常に目標を立てておくことの必要性

です。そのためには本人の欲求を刺激すること、親しい人の存在がkey wordとなるように感じました。

欲求に関しての知識はマズローの欲求階層説などを勉強することが必要ですが、生きることに對しての欲求を、脳性麻痺のご利用者様に感じる場合があります。この方々は、生まれながらにして障害を持っています。しかし、その殆どの方が「生きる」という意志をしっかりとっておられる様に感じます。以前、訪問業務で備前市の住宅街を走行していたとき、道端に停車していた車から男性が降りてこられました。その方はアテトーゼ型という不随意運動の強い脳性麻痺のように見受けられました。男性は近くの子椅子に移動されようとしています。その姿は非常に危なさそうに見えました。私は思わず車を降りて近寄り「大丈夫ですか」と声をかけたところ、男性は怪訝な表情で「大丈夫、いつも自分でしているから。自分で考えながらしているから構わないで下さい」と答えられました。



同様の事はリハビリに具体的な目標を持ち、自らが主体的に考えて行動しているご利用者様にも見受けられるように感じます。共通している事は、その方々は自らが生きるため、目標を達成するために、自ら考えていることです。

「元気がなくなっている」状態の方が元気になるためには、まずは本人が「元気になりたい」と望まなければなりません。そして「元気になる」ための方法を考え、模索する必要があります。とすると、いわゆる「やる気がない」というレッテルを貼られる方は、喪失体験の繰り返しによって考えることを諦めてしまっている、機能障害により考える能力が低下している、環境や機能障害により考えるために必要な材料が不足している状態にあるのかもしれませんが。この原因を分析し、専門性に基いたケアを行うことが重要といえます。

以上、自分自身の経験談を中心に述べてきましたが、その中には反省も課題も発見もあります。しかし、何が

正解かではなく、自身のケアを振り返り、考えることが大切だと思います。「心」を勉強する上でヒントとなることが「新・芯から支える」の中に書いてありました。「元気がなくなる理由」の対策の中の一つの、時を待つという部分です。私はこの時を待つという対策・姿勢がケアスタッフに一番大切なのではないかと思っています。何故なら「元気になる」ためにかかる期間は人により違い、すぐに結果が出ることでは無いからです。中には回復までに長期間必要な方もおられます。利用者が「元気になる」ための時間をただ待つのではなく、具体的手段（例えば日記や、環境設定、声掛けのkey wordなど）を駆使し、確かな方向性と確信を持って利用者に対峙する。そのようなスタッフの想いや「心」に対するケア技術をひたすら磨き続けることが、何事にも変えがたいリハケアの本質であり、どのような訓練や治療法に勝る専門性の一つになるのではないかと思います。

最後になりますが、「心」について考えることは、障害者だから必要なことではなく、生きている全ての人間に必要なことだと思います。「心」に対する専門性を高めることによって、リハケアの分野のみならず、いろいろな可能性が見えてくることを確信しています。自身、これからも多くの経験を積み、より具体的に「心」のケアに関して語れるように成長していきたいと思っています。

謝辞

機関誌のメンバー並びにこれまで関わらせて頂いたご利用者様に心より感謝申し上げます。

# 認知症プロジェクト



## 認知症の方は何を私たちに求めているのか？

認知症プロジェクト 代表

創心会訪問看護ステーション 作業療法士 吉中 京子

認知症の方と接する時に皆さんどのような事を考えられていますか？その方に何を言っても分からない、問題行動に対してどのように対処して良いのか、といったスタッフ側の視点で見ていることが多くなりやすい傾向にあると思います。しかし、それはご本人様が望まれている事ではありません。「自分らしく生きたい。自分の想いを分かってもらいたい。」といった事をご本人様が望まれていることです。この希望は、疾患とは関係なく全ての方に当てはまることではないでしょうか？そこで、まず、認知症の方の思いに一步近づくために、認知症の方の世界を覗いてみましょう。

(認知症の方が伝えたいこと)

- ・1人1人、その方の思いと物語を持っている。
- ・外見からは想像もつかないような苦しみ、そして希望を持っている。
- ・周囲の関わりと環境によって、よくも悪くもダイナミックに変化する。



### インタビュー

## 認知症実践リーダー研修について ～講義・利用者体験を振りかえって～

本部センター グループホーム心から

部門長 介護福祉士 山本 光紀

### Q. どんな内容の研修ですか？

A. 介護の経験が5年以上ある人が対象で、課題テーマについてレポートを提出し、選考されれば受講できます。

目的としては、認知症介護の知識・技術の向上をはかっ

(認知症の方が体験していること)

- ・周囲の世界と自分の世界がずれていく：時間・場所・事柄
- ・周囲の世界がつかめない：すりぬけていく、世界がぐらぐらする、ぶつぶつ切れる
- ・周囲の世界が自分を脅かす：声・音・光・影・広さ・物の固まり・スピードなど
- ・自分の身体が自分を脅かす：苦痛や不快に対処しきれず身体のシグナルが侵襲となる（痛み・かゆみ・苦しさ・だるさ、空腹など）、行動を自分でコントロールできない
- ・自分自身が崩れる：自分自身がつかめない・消えていく、自信・プライドが崩れる、気力がうせる、不安、孤独
- ・記憶に焼きついている大切な出来事や大切な人が、今まさにここに存在する

このような世界で認知症の方は過ごされています。私たちスタッフは、スタッフ側の視点にとらわれずに「認知症の方自身は、今、何を感じ、何を求めているのか」を探ることを取り組まなければなりません。みなさん、まずここからはじめてみませんか？

### 参考文献

永田 久美子：ケアスタッフのためのアルツハイマー病のケアの要点 認知症部会での使用した資料

て、サービスの質の向上をはかります。

生活支援改善コースとコミュニケーションコースと2つあり、私が受講しているのは生活支援改善コースです。

実践リーダー研修のさらに上の指導者研修を終了した人から、制度や医療面からの理解と、実践的なサービスについて講義を中心に学びます。

(講義時間：80時間(5ヶ月) / 実習2日間 / 自施設での取り組み 1ヶ月(対象者を決定しアプローチ方法を見直し、全体のサービス向上を目的とします)

(注)「認知症に関する研修・認知症介護実践リーダー研修(実務経験2年以上)→認知症介護実践リーダー研修(実務経験5年以上)→認知症介護指導者研修とあり認知症介護の質の向上を目指します。」

## Q、認知症介護になぜ専門性が求められるのですか？

**A.** 認知症介護は正解が無い仕事だからです。

認知症介護に基本的知識は必要です。そこに経験を加える事で予測することが出来るようになります。その上でかわり方、声かけの方法を工夫すると、ご利用者様の状態が変わってきます。(もちろん良くしていくのが私たちに求められる部分です) そして日頃から出来る事に手を抜かず、専門職としての誇りを持って取り組む事が大切です。私たちが提供させていただいているのは対人サービスですので、相手との関係性の中に課題が生じます。相手が何を発しようとしているのか感じ取る事、利用者にとって良い形に持っていき事こそ認知症介護の本質であり、そこに専門性が求められます。

## Q、具体的にどんな事が求められますか？

**A.** まず第1に認知症と高齢者へのイメージは、マイナスイメージが強い。(物忘れ、動作が鈍い・・・など) しかし、豊かな経験をして来た人たちであると、全体像として理解することが大切です。

全体像とは、どんな環境で育ったのか？どんな仕事をしてきたのか？趣味は何か？などで、そうした理解によって、関係性を変えケアのあり方を変え、ご利用者様の生活を変えるのが私たちの役目です。例えば一緒に食事をする、買い物に行く、趣味などを一緒に行うことで関係性(介護者と利用者という立場から対等の関係)を変える事が出来ます。それにより職員のケアの見方が変わってきます。一方的にお世話をするのではなく、仲間という意識で接していく事も必要だと思います。つまり一人の人として対応することが大切です。

ただし認知症の方と話をするときは丁寧に説明することが大切です。分からないのではなく「どう訴えたらよいのか」が分からないのです。認知症の方は人生の経験、心の健康も一般の方と同じです。訴えが多い人は心が健康な証拠なのです。そこを私たちが理解し接していく寄り添いのケアが必要です。「年をとったこと、健康を失った事、仕事、趣味、家・・・」多くの事を失ったご利用者様の、どうしようもない辛い気持ちを理解することから始める事が大切なのです。認知症ケアは、こうした状態にある方に対して「何もしてあげられないケア」という事が大前提にあるということなのです。こうした辛い気持ちを少しでも私たちが理解し、寄り添うことがもっとも大切なのです。こちらから「大丈夫ですよ」というのではなく「あんたがおるから安心よ」と言ってもらえる関わりが、どれだけ普段から出来ているか？ということ常を念頭に置き、関わっていく事が必要であると思います。コミュニケーションという言葉の日頃からよく

聞きますが、話を上手にするための技術ではなく、信頼関係を築いていくための技術であるということなのです。

## Q、利用者体験をしたと聞いたのですが？

**A.** 利用者体験とは、全く初めての施設で、知り合いもいないところで、1日8時間を何もせずに、座って過ごします。人の目が気になり、くつろげる場所がないことが不安で、すぐにでもその場を離れたい気持ちに襲われます。

座り続けることで足がだるく、おしりも痛い。いろんな声や、音が異常なほど耳につきます。

食後は、激しい眠気が襲ってきて、うとうとしてしまいます。(夜が寝られなくなるから起きといて下さいと言われるのはあまりに苦痛だった・・・)

やたらとテンションの高い職員に話しかけられる緊張感、「自分が何をしているのだろう」という目で見られている緊張感などに絶えず不安を感じていました。これはまさしく役割、居場所、地位などの喪失であり、グループホームなどに入居してこられる方の多くは、同じ様な気持ち、状況であると気付きました。

実習を終え、施設を出る時には、かつてない開放感を感じ、できれば二度としたくないと強く感じました。

この開放感を、少しでも少なくする施設作りをしていかななくてはならないと、この体験を通して痛感しました。

## Q、この研修を通じてどうサービスの向上につなげていきますか？

**A.** ご利用者様本意の生活にどこまで近づけていけるか。その人のことをもっと知って、ケアプランなど根本的に見直し1日の生活の中に、その人らしさをもっと出していけるように職員の理解を深めていきたいと思えます。

今まで私たちが見てきた事はコミュニケーションやケアプランにしても課題に目を向ける事が多かったと思えます。しかしその方がどんな人生を送り、どのように生きてきたのか、少し立ち止まって見つめなおす事が必要だと感じます。単にお世話をするのではなく、その人らしさを表現できる関わりが必要だと思います。また人はお世話をされることは嫌だが、お世話をすることは嫌ではないのが一般的です。お世話をすることだけが仕事になってしまうと、ご利用者様から「ありがとう、すみません」との言葉が返ってきます。しかしそれは気を遣わせているだけで、本来のケアではありません。私たちは「さりげなく」相手にお世話していると思われぬように接し「ありがとう」といわれないケアを目指して行きたいと思えます。こうした理解を職員全員がしていく事で、事業所全体の質の向上につなげ、ご利用者様の生活の充実を図っていく事が私たちの仕事の本質であると思えます。

# 私たちのサービスとは ～FIMを通して～

## FIMの得点とQOLの関連性について

創心会訪問看護ステーション エリアリーダー

理学療法士 仲野 真治

### ■ 「はじめに」

現在、日常生活動作（以下ADLと表記）の評価法として機能的自立度評価表（以下FIMと表記）が良く使われている。FIM評価は実際にしている動作を評価するものである。ゆえにこの得点が高いほど、ご利用者様の生活の質（以下QOLと表記）も高くなるのではないかと推定される。



本人の主観的な幸福感や生活の満足度といったQOLの評価はご利用者様の身体的のみならず、精神的な充足が治療効果や身体機能の回復に大きく影響することは多く言われているが、回答自体がご利用者様の主観に左右され調査指標の統一が未熟な事と、既存の評価指標の多くは質問項目が多い為に時間を要することから、臨床場面で聴取することは、実際のところ難しい。

今回、デイサービスで行っているFIM評価と高齢者のQOL評価指標としてPCGモラルスケール、また、Visual Analogue Scale（以下VAS）を用いてその相互に関連性があるかを調べた。VASはご利用者様の痛みや疲労感などの主観的な感情を評価する指標であるが、QOL評価として既にその信頼性と妥当性は確認されており、0（最低）～10（最高）の間で、現在の幸福感を評価した。

### ■ 「対象」

弊社デイサービスに通われているご利用者様25名（男性：10名 女性：15名）を対象とした。対象のご利用者様の結果を表1に示した。

評価対象者は日常会話が可能なことや認知機能に問題が無く、内容が理解できている方を無作為に選出した。

また、調査に先立って、目的と趣旨を説明し、個人を特定しない事に同意を得られたご利用者様に実施した。

### ■ 「検査項目」

主観的幸福感はVASを用いて調査した。調査内容は、あなたは現在幸せですか？一番良い状態であれば10、一番悪い状態であれば0と口頭で質問した後、各ご利用者様に実際に数値を書いて頂いていた。

また、PCGモラルスケールを用いて、主観的幸福感のアンケート聴取を行った。これはLawtonらにより開発された高齢者のQOL評価で17項目あり、各ご利用者様に対面調査を実施した。最高17点、最低は0点である。各質問は、「はい」・「いいえ」・「どちらでもない」の三つの選択肢から選び、幸福感の高い質問には1点、それ以外の答えには0点で合計点を出した。

FIM評価では、弊社デイサービスでのADL評価で用いている為に、その数値を使用した。

### ■ 「解析」

統計手法はVASやその他の相関分析にはCORRELを使用した。

### ■ 「結果」

表1：評価結果（ ）内は最高得点～最低得点

	モラルスケール	VAS	FIM
平均点	9.6 (2～16)	7.88 (10～3)	83.6 (119～45)
標準偏差	4.01995	1.8432	16.256

表2：相関関係

	モラルスケール	VAS	FIM
モラルスケール	1		
VAS	0.415821	1	
FIM	0.034387	-0.00657	1

- ・VASの平均値は7.88±1.8432点でありやや高い点数に推移している。
- ・相関関係は、モラルスケールとVASにはある程度の相関関係がみられた。

・モラールスケールとFIM、VASとFIMには相関関係が認められなかった。

## ■ 「考察」

QOLは、一般に人や社会の生活の質、つまりある人がどれだけ人間らしい生活を送り、「幸福」を見出しているかを尺度としてとらえる概念である。「幸福」とは財産や仕事だけではなく、住宅環境、身心の健康、教育、レクリエーション活動、レジャーなど様々な観点から計られる。<sup>1)</sup>とされている。

QOL評価については様々な研究が行われており、リハビリテーションを行う上でもQOLの把握は目標や方向性を決めていく上で重要な情報となる。

今回、FIM評価の点数とQOLがどのように関わっているかを検討した。事前予測では、しているADLを点数化しているFIMとQOL評価であるPCGモラールスケール、VAS評価の間には強い相関関係があると考えられた。これは、身体活動能力が高くなると生活の質が高まり、モラールスケールやVASの点数も上がると考えられた為である。

表1から、VASの標準偏差の値が小さく、全体的に高値にあることが分かった。VASが高値になった原因は、質問の「あなたは現在幸せですか？」が、現在を弊社デイサービス利用時での幸せを表している可能性が考えられる。主観的な幸福感は健康状態のみならず、社会的要因や家族背景などの影響を強く受けるとされている。このことからデイサービス内での存在役割が高かった為に高得点になったと考えられる。

また、表2からPCGモラールスケールとも相関関係がある程度はある事が確認された。両者はともに、幸福感を主観的に表している。この事から、臨床17項目あるPCGモラールスケールは時間等がかかる為に利用しにくい、VAS評価ならば簡単かつ短時間にQOL評価が可能な事がわかった。

しかし、モラールスケールとVASの双方がFIM評価の得点と相関関係は認められなかった。これは、FIM評価での点数と主観的なご利用者のQOL概念が違うところのある事が推測できる。モラールスケールはLawtonらにより開発された主観的な幸福感を示す評価指数である。「心理」「不満」「老いに対する態度」の3つの尺度に分類された質問に対して回答を得るものであり、特に疾患を有する高齢者の主観的な幸福感を評価するのに適するとされている。このことから、いくら日常生活での自立度が高くても、一概に生活の質まで向上したとは言えないと考えられる。良く言われているのがICFという社会参加レベルであり、自分の存在価値・意義が高ければ、「心理」「不満」面が安定しQOLも向上すると考えられる。

また、障害をおってからは、過去の元気な頃の自分と比較してしまい、どれだけ上手く動作をしようが、昔のとおりには動かない為に、QOLは低い状態であることが考えられる。過去の自分から脱却する為には、デイサービス等に参加して、同じ障害を持たれた方と自分の状態を比較することで、過去ばかりを見ている事から、現在を見るようになり、比較する対象も変わる事から、障害を取り込みやすくなり、結果としてQOLは上昇するのではないかと考える。

また今回の調査ではFIMとVAS、PCGモラールスケール間には相関関係は認められなかった。簡易的なQOL評価はVASで行うことは可能であるが、QOLの向上を図ろうとする為には、PCGモラールスケールの3つの尺度やFIMの各項目、その他の評価を実施し、分析して、QOLと関連が強い項目を見出す必要があり、重点的にアプローチを実施することで、QOLの向上が効率的に図れると考えられる。

## ■ 「課題」

今後の課題として、ご利用様が何を望み、何を提供させて頂くことで、このQOLが向上していくのかを考え、特に関連が深いものを見出していく必要がある。

FIMの点数は低いが、VAS評価やPCGモラールスケール評価が高得点な方がおられた。今後この方々に対して継続的に調査し、QOLはどこに焦点があるのかを検証していく必要がある。

ICFでは相互作用が存在する為に、心身機能・身体構造や活動、環境因子、個人因子、など多くの評価を統合して考察し、よりよいアプローチ方法でご利用者に接していくと考えられるが、評価に多くの労力と時間が必要であり、QOLと密接に関わる項目の評価方法の構築が必要である。

## 引用文献

1) ウィキペディア <http://ja.wikipedia.org/wiki/>

## 参考文献

- ・津山直一 標準リハビリテーション医学 第2版 医学書院
- ・前田真治 老人のリハビリテーション 第6版 医学書院
- ・中村隆一 入門リハビリテーション概論 第5版 医歯薬出版
- ・各評価表と使用方法  
[www.pref.hiroshima.lg.jp/mhwc/jigyousyokai/tyousakenkyuu/koureikinoseisinsikkan/kakuhyoukahyouto.doc](http://www.pref.hiroshima.lg.jp/mhwc/jigyousyokai/tyousakenkyuu/koureikinoseisinsikkan/kakuhyoukahyouto.doc)

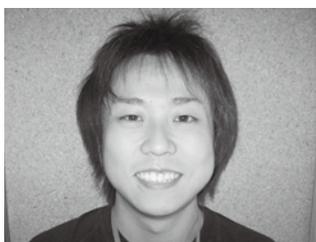


## 感動体験「心のバトン」

### サービス提供におけるチームの大切さ

帯江センター リハビリ倶楽部帯江  
管理者 社会福祉士 横田 昭彦

帯江で管理者として勤務させていただき始めてから、早くも2年が過ぎました。今回は日々の業務において、個々ではなくチームとして機能する事の大切さについて実体験として学んだ事を少し紹介させていただきます。



ご存知の通り帯江は小規模の事業所であり、他の事業所に比べると契約利用者様の人数も少ない為、ある意味少ない労力でも全利用者様の情報や日々の変化について把握がし易く、担当介護支援専門員の方への密な情報提供や意見の発信・発案ができ、日時的な書類業務の遂行においても比較的少ない処理で終わる事ができ、センター運営やスタッフの育成について考える時間を多く設ける事が容易であるという一面が少なからずあると思っています。茶屋町から異動してきて管理者を任される事になった時、私は気持ちが高ぶりすぎていたのでしょうか、自らが現場でも書類的な業務においても誰よりもネットワーク良く動き他のスタッフの業務負担量を減らす事こそ良き管理者であるという間違った責任感を背負って業

務に携わっていた時期がありました。しかし器用に効率的に何事も完璧にこなせる能力を持ち合わせていない私ですので、いつしか家族や担当介護支援専門員への報告・連絡・相談が疎かになってしまったり、書類業務に落ち度があったりといったような、あってはならないミスも多く犯してしまうようになっていました。そのような中あるパートスタッフが私に「しんどそうに見えるよ、出来るところは私たちがやるから、皆で支えあって頑張ろう」という言葉を掛けてくれました。さりげなく外線の対応をしてくれたり、利用者様の情報について把握している点について積極的に担当介護支援専門員や家族様に連絡をとっていただいたり、現場で笑顔を絶やさず楽しみながら、且つがむしゃらに業務に取り組んでいる姿が多く見られるようになってきました。同時に業務上のミスも少しずつ減り、他のスタッフは大きく成長し始め、サービス提供内容にも進歩が見られるようになり事業所としてのパフォーマンスも上がってきているのを感じ取れるようになってきました。チームのスタッフ個々の長所を見極め、それを最大限活かせる業務上の役割を各スタッフに持って頂く事で帯江はさらに前進していけるのではないかと感じています。私と同じ想いを持ち帯江を盛り上げてくれているスタッフ全員に感謝の気持ちを忘れず、私自身も管理者としてふさわしくあり続けられるように自己研鑽に努めていきます。

私からのバトンはリハビリ倶楽部茶屋町の菅森 美希さんに渡します。

### 出会えた事に感謝

琴浦センター リハビリ倶楽部琴浦  
フロアリーダー 社会福祉主事 中村 理恵

11月、リハビリ倶楽部琴浦を利用されていたA様が亡くなりました。享年56歳でした。A様は2010年3月にご利用開始とな



り、ケアマネジャー・訪問リハビリ・デイサービス全て創心会のサービスをご利用されていました。A様は2009年にくも膜下出血を発症し車椅子の生活となりました。

利用当初は右下肢の筋力が低下しているため立ち上がりや立位保持が難しく、車椅子からの移乗やトイレ動作など前方介助を行っていました。歩行器での歩行訓練では長下肢装具を使用して行っていたのですが、高次機能障害から注意力障害があり集中力が継続せず、麻痺側の足もひっかかってしまう事が多くありましたが、訪問に

入っているリハスタッフともA様のFIMを通して目標の設定や情報の共有を行ない、装具の着脱訓練や自力での移乗など、いろいろな事にチャレンジし、A様の身体機能は少しずつ向上していきました。A様は週5日リハビリ倶楽部を利用されており、毎日笑顔で頑張られるA様の姿にスタッフや他のご利用者様も元気づけられ、当たり前のようにこれから一緒に頑張っていこうと思っていました。しかし10月末にA様が突然入院されました。原因ははっきりとは分からずA様の復帰を待っていましたが、11月半ばの夕方、ケアマネジャーの方からA様が亡くなられたと連絡が入りました。突然の訃報に私たちは言葉が出ずただただ呆然です。そして翌日。まだ信じられない気持ちでA様の通夜に参加した時、通夜式場ではA様の若い頃の写真がスライドされていました。その写真にはA様が両足でしっかりと立ってカラオケを唄っている姿や、若き日のA様と奥様が寄り添っている写真などたくさんの写真がありました。その写真を眺めながら、A様の56年の人生は短い人生だと思ったけれど56年間にはたくさんの思い出やA様が歩んできたとても長い時間があり、その人生の一時に私たちがA様と出会えたのは奇跡…というか“縁”があったのだと深く

感じました。

いつも笑顔で不満も言わず前向きにリハビリを頑張っていたA様。奥様と名前呼び合い、お互いに支え合っていたA様。朝からスタッフの名前を呼び優しい声で「おはよう」と来所するA様。ご利用者様にもスタッフにも人気者だったA様。私（私たち）はA様に心に寄り添うサービスが提供できたのだろうか、何ができたのだろうか、後悔はないだろうかと考えてばかりでした。そんな時、通夜葬儀の後日に奥様からのメッセージ。「悔いはありません。本当にありがとうございました。」という言葉が心に染みしました。私たちの職業はご利用者様の死と向き合わなければならない時が必ずあります。

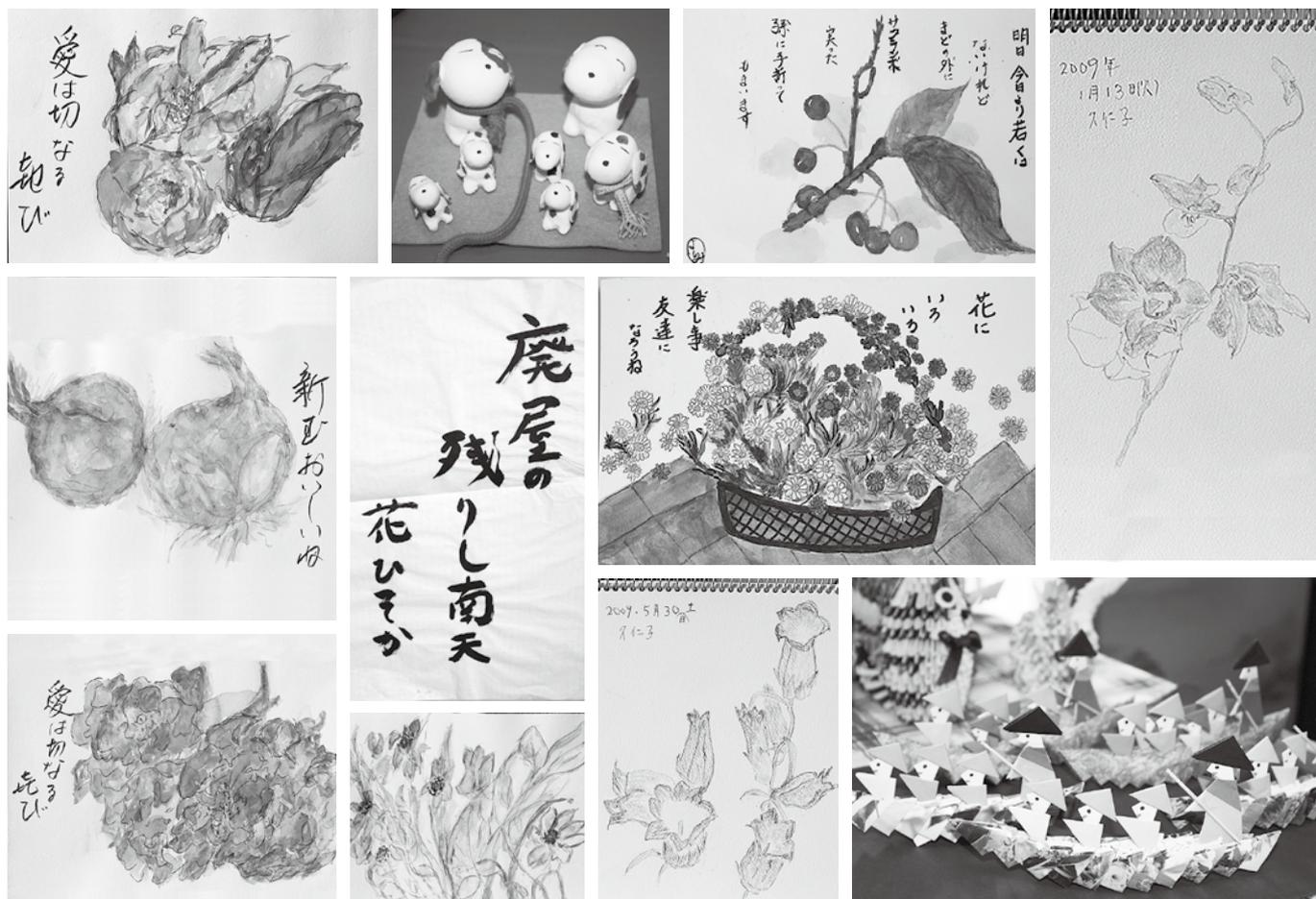
ご利用者様が最後まで良い人生だったと思って頂けるように。一日一日がご利用者様にとって大切な時間であること。そして縁があって出会えたこと、ご利用者様一人ひとりの人生に真剣に向き合う事とはこんなにも大切な事なのだ実感する事ができました。

出会いに感謝です。A様ありがとうございました。

私からのバトンは、同じ琴浦センターのパートナーでもある 京兼 里枝さんに渡します。

## ご利用者様の作品アルバム

album





## 提言

# 心こそ大切なれ

本部センター 生活環境プランニング

部門長 福祉用具専門相談員 原田 薫

## 「はじめに」

“心こそ大切なれ”

これは、私が座右の銘としている言葉で、昔の偉人が、伝え残された名言です。何をやるにしても、そこに、真心がないといけない、また、同じ行動でも心がどこに向かっているのか、何を伝えようとしているのか、見えない心こそ大切と言うような意味です。



21世紀の現代、人間関係が希薄化してきているこんな世の中だからこそ、“心”が重要視されなければいけないと私は感じるのです。

しかし、一言に“心”と言っても、目に見えないもので、他人に理解してもらうには、表に出さないと理解してもらえません。だから、相手を思いやる行動（＝思いやりの行動）、相手への心遣い（＝心遣いの行動）と言った表現をする（行動に表す）事で相手に伝えるのです。

澄んだ心や熱い思いは、その人と深く関われば、次第に見えてくるかもしれません。しかし、それには、信頼関係を築く為に、かなりの時間を要する場合が多いのも現実です。また、自分自身も心の内を語り、表現しないと周りの人に真意を伝えるのは難しいのです。

皆さんご存じのように、創心會は、「心を創る」事をとても大切にしています。「心を創る」。つまり、ご利用者様にその気になって頂く為に、まず、関わる私達の心を創らなければいけないと思うのです。社長が、よく言われる「主体変容」、相手に合わせて、自分自身が変わっていく事に繋がるのではないかと私は考えます。そう、結局、自分自身が変わっていけば、相手の心の扉を開かせる事ができ、お互いの関係性に変化をもたらす事ができます。その上で、相手の心を知る努力が必要です。また、自分自身も心の内を相手に伝える努力も必要です。つまり向き合う事が大切なのです。

## 「他人と向き合う」

向き合うと言っても、意外と難しいと感じます。私が常日頃から、他人と向き合う時に心掛けている事は、「そ

の方が今何を感じ、どう思っているのか。そして、今、何を求められているのか。」と言う事を言葉の端々や奥底、また行動から読み取る努力をしています。ご利用者様からすれば、娘や孫のような年代にあたる私達の提案を受け入れて頂く為には、その方を人生の大先輩として尊敬した上で、その方の背景となる人生劇場を言葉や行動から垣間見させて頂く事で、より深く、その方に向き合えるのではないかと感じています。

人は、誰しも無意識のうちに起こしてしまう様々な言動には、必ず意味がある、私はそう感じています。なぜ、その様な言葉を発してしまったのか、また、なぜ、その様な態度、行動を起こしてしまったのか、すべて意味のある事だと感じます。それは、ご利用者様に限った事ではありません。もちろん私自身の言動も同じです。折々に自身がなぜ、そう感じ、そのような言動になったのかを、振り返り、次に活かし、向上していけるように努力しています。とにかく相手を知ろうと努力し、そして、誠実に向き合う。そこからしか、全ては開けてこない。私は、そう思って行動するよう努力しています。

先に述べた様に、相手の心の扉を開くには、まず自分自身の心の扉を開く事。その上で、相手を受け止める事。相手を受け止める為には、相手を知らないといけない。相手を知るには、対話をしないと知ることはできません。

そう、対話です。会話ではなく、対話です。ただ会って話をするのは会話。心と心向き合わせて話をするのが対話だと私は思います。対話する中で、自分自身の心を知る事ができます。そして、同時に相手の心を知る事もできます。更に、その人の芯となる部分に少しでも触れる事ができると、より相手の事を知りたいと思う。そうしていく中で、本気で向き合う事ができるのではないのでしょうか。

## 「向き合う事と入り込む事のの違い」

しかし、ただ向き合っているだけだと、ともすれば、相手に入り込みすぎて、抜け出せなくなってしまいます。つまり、感情移入しすぎると周りが見えなくなってしまうのです。特に女性は、生まれ持って母性があります。その母性本能から、感情移入し、入り込みやすい特徴があります。

では、入り込みすぎず、ちゃんと向き合うには、どうしたらいいのでしょうか。私自身、対ご利用者様ではありませんが、過去に入り込みすぎて、失敗した事があります。その経験の中でも学びましたが、真摯に向き合う為には、確たる自分を持ち続ける事。「同苦（同じように苦しみを感じ取る事）」しても、「同調（同じ調子になる）」してしまわない事が大切なのではないでしょうか。

「同苦」して、その人が、自律して生きていく為に自分にできる事は何かを考え、行動する事。結局、どんなに苦しい事があっても、最後に這い上がってくるのは自分自身なのです。たとえ、一時的にどん底からすくい上げる事ができたとしても、自分自身の力で這いあがっていないと、結局は、また自分から落ちていってしまうのです。自分の力で這いあがってこなければ、何度でも落ちていってしまう。私は今までそんな方をたくさん見てきました。また、ともすれば、自分自身も一緒に落ちていってしまい、這い上がる事ができなくなってしまいました。

だからこそ、私は、関わる方が、自分の力で這い上がれる為の支援をしていきたいと願っています。その為には、まず、“その気”になって頂かないと行動に移すことはできません。ご利用者様も私達も同じだと思います。その気になって頂く為に、私達は、日々努力し続けなければいけないと感じます。その為に私は色々な方と向き合うのです。

## ■ 「がんばる事とは…」

“何のため”、これを忘れてしまえば、全てが無意味になってしまいます。つまり、冒頭にも述べた、座右の銘の「心こそ大切なれ」の言葉の様に、自律支援の為に私は、自分自身の心を磨き続けていきたいと思えます。何のためにその心を磨き続けるのか、日々自身に問いかけていく事を忘れないようにしていきたいと思えます。

全てにおいて、「何のため」、これを忘れてしまえば、人生は簡単に墮落してしまう。“人がどう”とかでは無く、自分自身がどうなのか。自分に誇れる生き方をしているか。それが一番大事だと思います。

負けそうになった時は、自分としっかり向き合い、人生を歩んでいきたいと思えます。昔、ある方に言われた事があります。「頑張る」とは、今にも切れそうなくらい自分を張り詰めていく事ではなく、「顔晴る（がんばる）」事が大切だと…。つまり、一生懸命頑張った結果、自分の「顔」が「晴れ」やかになる。それが本当の頑張りではないか。私は、自分自身の顔を晴れやかにするために生き、仕事をしていきたいと思えます。

## ■ 「言葉の重要性」

今まで述べてきたような事を、日々実践し続ける事は、とても大変なことです。そんなの綺麗事だと言われる方

もいらっしゃるかも知れません。しかし、「心こそ大切」なのです。例え、現状出来ていなかったとしても、常に自分自身の言動を振り返る時間を作る事で、次につなげていけると確信しています。

その上で、前にも述べた様に心を表現するには、言葉が大切になってきます。言葉と言っても、色々な要素があります。

まず、言葉自体の表現です。例えば、『～しなさい』と言われるのと、『～して頂けますか』と言われるのでは、言っている本人の気持ちも受け取る方の気持ちも大きく変わってきます。経営計画書の17ページの「ご利用者様に対する基本的な考え方」にも書かれているように、どんな時も、何年たっても、いえ、年数を重ねれば重ねるほど、謙虚にならなくてはいけないと感じ、自身にも戒めています。

次に、話をする時の声のトーンとスピードです。もちろん、持って生まれた声のトーンを変える事はできませんが、その持前の声の出し方が大切だと思うのです。同じ声でも、落ち着いた少し低めの声で話すのと金切り声の様にかなり高い声で話すのとでは、受け取る側の気持ちが変わってきます。

世界三大美女の一人、クレオパトラが、本当は、そんなに美人ではなかったという説もあります。では、それなのになぜ美人だと言われていたのか、それは、声が美しく、人の心をひきつける何かがあったのだと言われていています。このように、声のトーンで人の印象は、大きく変わってくるのです。

また、ゆっくり落ち着いた感じで話すのと、機関銃のように喋りまくるのとでは、受け取る側の気持ちも大きく違うのではないのでしょうか。特に年配になると、高音が聞き取りにくく、話すスピードが速すぎると理解しにくくなってきます。相手に合わせ声のトーンやスピードを調整していく事が大切です。

この他にも様々な要素があると思いますが、一番大切なのは、「言葉」事態だと思います。私の持っている本の中で、この「言葉」の力を科学的に解明した物があります。その本を読まれた方もいらっしゃると思いますが、「水は答えを知っている」（著者：江本勝氏、サンマーク出版）と言う本です。



その本の中に「言葉は心のあらわれです。どんな心で生きているかという事が、体の70%を占める水を変え、その変化は体に現れるのです。健やかな体を持っている人は、心も健やかです。まさに健全な精神は健全な肉体に宿るのです」(同書)とあります。この本に書いてある事が全てとは思いませんが、とても共感できます。それだけ心の作用は、全てに波及していくということの証明ではないでしょうか。その心を表現する方法の一つが「言葉」です。この本の中では、水に様々な印刷した文字を見せ、その水を結晶化させた時の結晶の形が全て違うと言う事が証明されています。どう違うのかと言うと、例えば、「ありがとう」や「感謝」と言う文字をビンに張り付けた水の結晶は、綺麗に六角形になり、とても美しいものです。逆に、「ばかやろう」とビンに張り付けた水の結晶は、ばらばらに結晶が砕け散っていました。同じように、「しようね」という語りかけの言葉を張った水は、形の整った結晶になり、「しなさい」の方の水は、結晶を作る事ができませんでした。この実験が教えてくれる事は、私達が日常口にしてしている言葉がいかに大切か、と言う事です。良い言葉を発すれば、そのバイブレーションは、物を良い性質に変えていきます。しかし、悪い言葉を投げかければ、どんな物でも破壊の方向へと導いてしまうのです。とあります。言葉には、はかり知れないパワーがあると言う証明でもあります。

水が、言葉によって如実に変化するという事ですが、私達の体の70%は水と言う事を考えると、私達の体にも、ご利用者様の体にも、言葉によって大きな変化をもたらす事ができるという事だと思います。創心會のスタッフの中に、「ばかやろう」と言う様な野蛮な言葉を使っている方はいないと思いますが、言葉の使い方一つで、大きく世界が変わってくると言う事ではないでしょうか。

言葉の奥底に潜んでいるのが、心です。だからこそ私は、冒頭にも述べた「心こそ大切なれ」という言葉を座右の銘として、生きているのです。

しかし、自分の心は、自分の尺度で押し量られます。例え間違っても、本人が、その考えが素晴らしいと自画自賛していれば、間違った方向に行きかねないのです。だからこそ私達は常に間違っていないかを自身にも問い、また、様々な尺度で評価していく必要があります。

## || 「結びに」

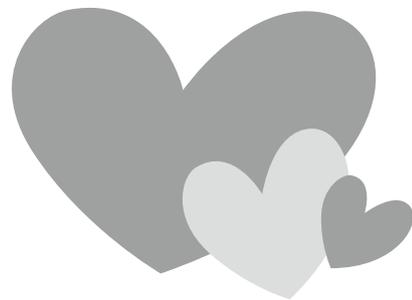
これまで心、言葉について色々述べてきましたが、全ては、15期の会社のテーマでもある「徹底した利用者志向」を実現する為に繋がっているのです。

「徹底した利用者志向」を実現するためには、本気でご利用者様に向き合う必要があります。そして、その為には、使命感がないと続けていけないのではないのでしょうか。「使命」、それは、自分の命(心と身体)をどう使

うかだと思えます。誰かに与えられる物ではなく、自分で見出していく事だと思います。

全て自分から始まり、自分で決めていくのです。しかし、最後の最後まで使命感に満ち溢れて生きて行く事は大変な事です。使命感を継続していく為には、人々と団結するしかありません。けして、一人で孤立して生きていくのではなく、共に団結し、共に行動する。そうやって励まし合い、支えあう事が重要だと感じます。そして、もし万が一自分の考えが間違っていれば、客観的に周りのスタッフにより、修正を掛けてもらう必要があります。その為に組織があり、会社があるのだと思います。

人は、案外弱いもので、一人では、いつかわがままになり、最初の思いからは逸脱してしまうのです。だからこそ、共に触発し、共に向上するそんな会社になるよう私自身、これからも努力していきたいと思えます。ダイヤモンドがダイヤモンドでしか磨かれないように、人も人との関わりの中でしか成長は無いのです。だから、これからも私は、人と関わり、成長し続ける人生を送っていきたいと思えます。また、周りのスタッフにいい影響を与えられる自分自身でありたいと思えます。これから、会社もどんどん成長していくように私を含め創心會のスタッフ全員が切磋琢磨しあえるよう取り組んでいきたいと思っています。皆さん、一緒に頑張りましょう！



## コラム

# 『河崎のイメージ ～「理念力」について考える～』

益野センター リハビリ倶楽部益野 ブロック長  
益野センター センター長 兼 リハビリ倶楽部 管理者 介護福祉士 河崎 崇史

## ■「まえがき」

お初にお目にかかります。この度私がテーマに取り扱うのは「理念力」です。これは、資格・職種・部門に関わらず、創心會に所属している全ての人の共通概念であります。初期研修以降はその理解度や実行・蓄積は個々の自覚に委ねられています。「ハッキリ言って理念力があるとどうなるの?」今回はそこら辺の自説を述べさせていただきます。



## ■「目的・経緯・背景」

このコラムでは、株式会社 創心會の社員の共通概念である「理念」について。筆者の解釈を展開し、読者自身が自身の価値判断・行動規範が理念と一体化しているかを見直し、「理念力」を具体的に捉えることをねらいとします。

## ■「方法・理論・考え方」

理念力とは、「当社であればどういう基準で判断するか?」といった判断の軸(行動の根拠)を定義し、価値基準、行動規範と解釈されるものである。つまり、理念に相応しい行動を決定できる力、思考能力を指す。よって理念に基づく行動とは、社員が自身の所属する組織の理念を我が人格の基盤として姿勢・態度に反映し事業活動を行っていくことといえる。

## ■「実施実行・結果」

それはいったいどういう姿勢・態度なのか、ある企業の経営理念を参考に紹介しますので、その理念を知りその企業の理念と事業活動との一体化の程度をイメージしてみましよう。

外食産業大手の「ワタミグループ」の経営理念

「地球上で

一番たくさんの“ありがとう”を集めるグループになろう」

化粧品事業の他、美容、健康食品、医薬品事業も展開する「資生堂」の経営理念

「私たちは、多くの人々との出会いを通じて、新しく深みのある価値を発見し、美しい生活文化を創造します」

ファミコンからwiiまで、玩具メーカー「任天堂」の経営理念

- 1、娯楽の世界
- 2、非常識の発想
- 3、独創の旗印
- 4、哲学などない

筆者の感想、

この3社の経営理念を読んで、私は「え!そんな理念でいいの?」「なるほど~!そうだろうねえ。」「けっこう大胆で抽象的な理念だなあ。」という感想を持ったのであった。

ワタミは全国展開の外食ビジネスの他、新たに介護や病院経営、農業にも挑戦している。

資生堂は化粧品だけでなく“美”というカテゴリーを拡げ、内面からの美を追求している。

任天堂は家庭用ゲーム機による世界的な支持を得ており、誰もがその作品に親しんでいる。

どの企業もその理念は事業活動と一体化しており、独自性の高い納得の企業イメージである。また驚くのは、私はそれら企業の社員ではないけれど、その企業の取り組んでいる事業内容と理念に共感ができた。何をやっている企業なのか私なりにイメージが出来ること、「〇〇らしさ」が第3者的にも伝わること、それが素晴らしいと思うのである。

続いて、

医療・介護の総合ケアサービス 創心會の経営理念

「私たちは

心に寄り添った本物ケアで心豊かな生活を創造します」

筆者の感想、

先程の他企業の理念を知った後に自社の経営理念を読んだ私は、「“心”って誰の心?」「本物ケアってアレのことだよな?」「心豊かな生活を創造するって結局どんな生活のことだろう?」という思考を巡らせました。

あらためて想像してみましよう。

創心會らしさとはどんなことなのか?

社員は具体的にどんな姿勢・態度なのか?

理念が具現化されるとどんな様子なのか?

社員である(あなた)私が今想像でき得ることの具体度が「(あなた)私の理念力」ではないでしょうか。上記の要素は経営計画書の冒頭約30ページに集約されています。私は自社理念と一体化が図れているのか、その考察をいたします。

## ■ 「評価・結論・考察」

創心會の理念は当事者意識を持つことから始まる。「私たちは…」を「河崎は…」と自分の名前に言い換えて唱和するとよくわかる。

「心とは、ご利用者様、ご家族様、支援に携わる関係者、私たちの心の状態」

「本物とは、ご利用者様の予後の可能性を拡大する方向や手段を追求すること」

「心豊かな生活とは、その人が“自分らしいな”と、生活を肯定していけること」

- 理念を具体的行動目標にしたものが「経営目標」である。
- 企業の存在目的を示しているものが「三大目的」である。
- 創心會らしい社員の在り方を示したものが「基本的心構え」である。
- 本物ケア宣言・創心流リハケアの視点に沿ってご利用者様のあらゆるライフステージを包み込むのが、創心會の目指すトータルケアの形である。

こうしてみると既に私たちは「自社における理念力」の概念を共有しているのだ。しかし、勤務年数が増す程、私は都合よく理念を解釈していると気づかされる。「心豊かな生活を創造する会社」なのに案外社員である私は創造(想像)していない。日常業務の一片一片における理念の実践を狭く浅くしか思考していないのではない。また世間・外部の方が、創心會の理念を知った時に私たちのこれまでの活動はどう評価されるだろうか。先他企業の理念から想像を湧かせたように、創心會も同

様に「○○らしさ」と思考してもらえらるだろうか。ある一日の、ある社員が理念に沿った相応しい姿勢・態度を実践していった結果の連続によって、創心會らしい企業活動という成果が生まれ、世間に周知・支持されていくのであろう。

理念力があるとうなるのか?最後にこの問いに答えようと思います。

私同様、社員皆の理念解釈の広がりや深さは様々ではあるけれど、組織として成長を続ける上で欠かせない成功要因だと思います。特にこれだけ社会環境の変化が激しく、今や多様な価値観をもった人財が集まっている当社組織において、意思決定のスピードを早め、共通言語による対話を促進し、一人一人が自律的に判断し、行動できることは、他の組織との差別化になるだろうと思います。つまるところ理念の徹底は組織の成長・成功戦略の有効な一手法なのだと思信できるのです。(ディズニーランドでは夢を与えるという理念により、苦情・事故場面においても“魔法に魅せる”という対応を一貫することで夢と感動の空間を成立させている)

## ■ 「あしがき・謝辞」

ここまでは私の尺度で綴ったことです。読者の皆さんはぜひ身近な方々と意見交換していただき、創心會らしさで出来ることを創造(想像)していきませんか。

### 参考文献

ジョン・レノンの代表作 イマジン【imagine】の歌詞より。

### 付録

イマジン

想像してごらん 天国なんて無いんだと  
ほら、簡単でしょう?  
地面の下に地獄なんて無いし  
僕たちの上には ただ空があるだけ  
さあ想像してごらん みんなが  
ただ今を生きているって...

想像してごらん 国なんて無いんだと  
そんなに難しくないでしょう?  
殺す理由も死ぬ理由も無く  
そして宗教も無い  
さあ想像してごらん みんなが  
ただ平和に生きているって...

僕のことを夢想家だと言うかもしれないね  
でも僕一人じゃないはず  
いつかあなたもみんな仲間になって  
きっと世界は1つになるんだ

想像してごらん 何も所有しないって  
あなたなら出来ると思うよ  
欲張ったり飢えることも無い  
人はみんな兄弟なんだって  
想像してごらん みんなが  
世界を分かち合うんだって...

僕のことを夢想家だと言うかもしれないね  
でも僕一人じゃないはず  
いつかあなたもみんな仲間になって  
そして世界はきっと1つになるんだ



# センターの取り組み

『児島センター第4回望年会開催』 12/28・29

児島センター リハビリ倶楽部児島 フロアリーダー 介護福祉士 荻野 由紀子

## ■ 「はじめに」

「望年会」は今回で4回目を迎えます。大石常務の発案のもとに始まった「望年会」。

名前につく「望」は、希望！前進！いつも前向きに！との想いが込められています。

「可能性に挑戦！私が主役！！」をテーマに、`ご利用者様が中心となって企画し、ご利用者様全員が参加できる参加型の会を目指す。一緒に作り上げる過程で、新たな挑戦をする機会を作り、それをクローズアップして達成感・有用感を感じていただき、ご利用者様の新たな可能性を発見していく、ことをねらいとしています。

<望年会の内容>

### ① 昼食作り

昼食メニューはあらかじめ鍋と決め、脳トレの時間を使って各チーム何鍋にするか、具材や味付けを考えようと企画しました。準備担当、調理担当も決め、更にその気になっていただく為にエプロン・三角巾なども各自用意していただくようお願いしました。失語症や認知症の方に配慮し、手帳を通じて持参物の内容をご家族に伝えるようにしました。結果、この会をご利用者様だけでなく、ご家族も大変楽しみにしてくださり、家庭でも会話が弾んだとの声を多くいただくことができました。



### ② プレゼント作り

アクトの時間を利用して`みんなで作ろう90枚新

聞バック！、を企画し、多くのご利用者様が参加してくださり、無事完成。その中には、スタッフ顔写真入りカレンダーとメッセージカードを入れプレゼントしました。カレンダーは、スタッフから利用者様はよくスタッフの話題をご自宅でされているらしいという話をヒントに、ご自宅でさらに話題が広がればというスタッフの案で作成をしました。



### ③ 当日の内容

内容は脳トレの時間に、ご利用者様各自にアイデアを出していただくことにしました。

当日まで、わくわく感を持っていただくために、毎週火曜日と水曜日の脳トレの時間は「望年会」の企画検討時間にあて、ご利用者様主体で全て進めていきました。その中の一つに「福笑い」があり、提案してくださったご利用者様は、企画内容の詳細、進行方法までしっかり考えてくださっていました。

一番盛り上がった企画として「20歳の写真展」。これは、ご利用者様に若かりし頃の写真を持参していただき、当日誰かをあてる企画です。30名の方が写真を提供してくださり、自宅では写真を選ぶため家族でアルバムを開き、当時の思い出に話に花がさいた、との嬉しいコメントも寄せていただきました。望年会をきっかけとして、ご家族の絆がより一層深まるなど、私たちが予想していなかった効果も見られています。

## ■ 「さいごに」

全員参加型のこの会は、会を重ねるごとに大きな感動

と収穫があります。

今までは全てが受身だったご利用者様が、驚くほどのリーダーシップを発揮され、チームをまとめてくださり、ご自分の存在が確認できたことで、他のご利用者様を想う気持ちが行動で表現できるようになった方など、こちらの方が多くのことを学ばせていただいているように思います。

ご利用者様の変化は、ご家族からも多くお話をお聞きしており、嬉しそうに準備をされていたこと、ご自宅で「望年会」で作った料理を作られたことなど、微笑ましい話題がつきませんでした。企画も脳トレの時間を活用し、ご利用者様主体で検討していただくことで、ご利用者様の気持ちの変化していく過程を私たちも感じることができました。

こういった前向きな行動の積み重ねこそがメンタルアティテュードの形成に繋がっていくと私たちは考えています。

ご利用者様が前向きに生活していけるよう、シフトチェンジしていただく為に、こういった企画を積み重ね、自信をつけていただきたいと思います。そして私たちも

ご利用者様から刺激を受け成長していきたいと思っています。



## 第4回ジャーナル会開催を終えて

### 編集部より

2009年から本部グループホーム千葉さんが中心となり、ジャーナルが発刊される度に各センターでジャーナル会～意見交換会～を開催されています。

ジャーナル会の目的は、創心會、現在15センター、400人を越えるスタッフの1人でも多くの人と交流を持ち、意見を交わし、切磋琢磨していくこと。勉強会は各センター等で行なわれていますが、とりわけこのようなメンタルが中心の意見交換会は、これからは特に大切だと千葉さんは考えられ、継続されています。

ジャーナル会発足の記事は2009年冬号について掲載していますが、その後の経過を今回、千葉さんに報告していただきました。

### 第4回ジャーナル会開催を終えて ～ジャーナル会発足から1年が経ち・・・～

本部センター グループホーム心から  
千葉 好浩

このジャーナル会も2009年よりスタートし、1年が経過しました。ここで少し振り返りたいと思います。第1回は、吉備・児島・琴浦センターにて、第2回は、笹沖センター（リハビリ倶楽部、元気デザイン倶楽部、五感リハビリ倶楽部）にて、第3回は、中洲センターにて行い、





これまで約50名のスタッフと共にディスカッションをしてきました。開催に協力して下さったセンターの皆様には深く感謝申し上げます。時間の都合上、参加できなかったスタッフの方からも参加したかったという声を聞くことができ、私自身大変嬉しく感じています。

2010年11月には、岡山センターにて第4回ジャーナル会を開催しました。今回のテーマは、夏号の特集でもある「環境適応能力の質的向上」についてディスカッションを行いました。皆様も、もう1度このテーマについて考えてみて下さい。自分達の生活の中にも数多くの「環境適応能力」というものが存在しています。あまり意識しないことですが、自分はどのようにその環境に適応しているのかを考えると、新たな発見にも繋がると思います。「考える」ということを、ジャーナル会を開催することで、私自身も様々な場面で今まで以上に考えるようになりました。

そもそもジャーナル会は、一言でいうと「交流会」です。以前の機関誌にも書かせていただきましたが、メインは、意見交換会です。参加者全員が自分の意見を述べる機会を設ける事を条件として、自分の意見や他者の意見を共有することを目的としています。ただ交流するのではなく、他の方の意見を聞き、自分の意見を発表することで新たな気づきがあると思います。ジャーナル会としては、その個人の感性を大切に、この交流会を行うことで、1つでも多くのことを吸収して頂きたいと思っています。そのためには、私自身、数多くのスタッフの方々の意見を共有することが大切だと、今までの経験で感じています。その中で、年4回発行されるこの機関誌を有効活用しながら、意見交換会を開催しています。

内容の一部として、その号の特集テーマに沿って自分の生活の中での状況を考えます。そのことによりそのテーマの根本を考えます。第4回ジャーナル会では、児島センター長の坂本さんの原稿を参考にし、自分の生活の中での「環境適応能力」はどんな場面にあるか、また困った時にどのように対処したか実体験をもとに、1人

ずつ発表しました。「短い時間の中で関係性を深める実習等の場面が難しい」ことや「実家がある島にコンビニがなく引っ越してコンビニがある環境にははじめは適応しなかった」などの意見があり、ジャーナル会終了後には「意見交換を行うことで、他の人がどのように考えられているのか知ることができ、よかった」「改めて環境適応能力について、自分の言葉で話すことで、当事者としての認識をすることができた」などと意見が挙がりました。

毎回、開催する度に改善点などの提案もしていただき、回を重ねる度に充実していると感じています。感想をいただく機会もあり、企画して良かったと実感するとともに、今後もより一層、力を入れて取り組んでいきたいと実感しています。皆様の声が私自身の大きなモチベーションにも繋がっています。

次回は、この冬号をテキストにし開催したいと思っています。私1人ではまだまだ未熟な点が多いですので、ぜひとも皆様の力をお借りし、充実した会になるよう頑張っていきたいと思っております。また、今後は、私自身も行なっていくことができますと考えています。協力して下さる方がいれば、千葉まで声をかけてください。

最後に、この度も機関誌編集長の赤澤さんから原稿の依頼があり、またこのように皆様に発信できる機会を作っていただいたこと、そしてまたジャーナル会が開催できる機関誌を発行して下さった機関誌編集部の皆様に深く感謝申し上げます。





## 特別研修会

# 夢のみずうみ村

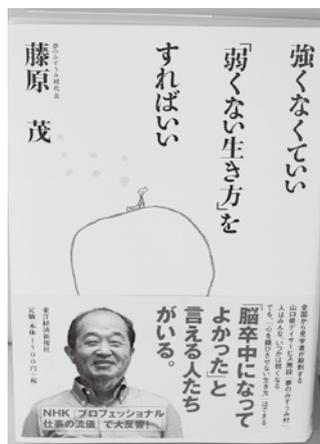
## ～藤原 茂氏 特別研修会開催～

みなさん、「夢のみずうみ村」をご存知ですか？名前を聞いただけで、どんな素敵な場所だろうか、そこにはどんな人たちがいるのだろうか、一度は訪れてみたい心躍る気持ちになります。

この度、その夢のみずうみ村代表藤原 茂先生と、二神社長とのこれまでの交流により、記念すべき「特別研修会」が、我が創心會に於いて開催決定いたしました。開催に伴い、多くのスタッフが、藤原先生著『強くなくていい「弱くない生き方」をすればいい』に出会う機会をいただきました。この本は、藤原先生が「あの本は藤原のすべてです。夢のみずうみの精神そのものです。」と言われ、読んだスタッフ全員の意識を必ず変えられる

本だとも断言されています。

「夢のみずうみ村」にある湖。湖の底から湧き出る水は、みなさんの夢。湧き出る夢の実現に向け、藤原先生からたくさんのごことを学び、各々が新たな発見をされることを願っています。



### ■ 「二神社長よりメッセージ」

2月13日に特別研修会が開催されます。講師の藤原茂先生と私は十数年来のお付き合いになります。藤原茂先生を一躍有名にした施設「夢の湖村」と創心會の「リハビリ倶楽部」は殆ど時期を同じくして誕生しましたが、運営手法についてはかなり異なります。また、藤原先生は作業療法士としても、その発展の為に共に団体を立ち上げ、東京・大阪などで活動する同志でもあります。

さて、藤原先生はTVや新聞、雑誌などで紹介されるようになり、特に昨年放送されたNHKのプロフェッショナルで大変有名になりました。藤原先生の取り組んでいる「夢の湖」、そしてお人柄などからもファンが全国

にできました。藤原先生は自らの主催で研修会を全国各地で行っています。しかし特定の事業者団体などに対しては絶対に研修会をされていません。ですから今回の特別研修会はかなりプレミア感があるのではないのでしょうか。今回の研修はいわゆる「いける施設、いけるサービス」のいいところを盗み出し、創心流に落とし込み、自社のサービスの向上をもって利用者の皆様に還元することを第一義にしています。

是非とも今回の研修が皆様にとって活きた研修となり、知識となり皆様の財産になるよう強く願っています。皆さま、ぜひ特別研修会へご参加ください。

### ■ 「夢のみずうみ村」へ見学に行ってきました

～倉敷ブロック長 介護福祉士 山田 浩貴～

夢のみずうみ村には、仕掛けが盛りだくさんです。藤原先生の著書にも登場しています“ユーメ”（夢のみずうみ村の通貨）を、サービスを通して稼ぐ、使う仕掛けがあちこちに存在しています。何がすごい一言でいうと“サービスが徹底している”ということです。全てのメニューに自己決定、自己選択の意志が込められています。当然のことながらスタッフの意志にも刷り込まれていますが、利用者さんが自信を持ってそれを見学者の私たちに説明して下さるのだから驚きです。是非今回の研修参加者の方には自らの宝となり、更なるサービススキルの向上につながることを願っています。

### 【藤原 茂先生プロフィール】

- ・1948年山口県萩市に生まれる。
- ・中学校から広島にて下宿生活し高校を卒業後、大学で児童養護施設の子供達と生活を一緒にして学び、33歳で都立府中リハビリテーション専門学校の作業療法科を卒業する。
- ・精神科作業療法、高齢者リハビリテーション、身体障がい者・発達障がい児リハビリテーションの各施設にて体験を積み1996年山口コ・メディカル学院に招聘され作業療法学科長を経て現在同校顧問として活躍。
- ・2000年、特定非営利活動法人「夢の湖舎」を設立した後、翌年、「夢のみずうみ村」山口デイサービスセンターを開設し、さらに法人組織としての「株式会社夢のみずうみ社」をつくり、2005年10月には「防府デイサービスセンター」の開設、引き続き2006年小規模多機能型居宅介護事業所「夢ハウス仁井令」の開設、2010年5月には小規模多機能型居宅介護事業所「夢ハウスゆだ」を開設した実績を誇る。



# 創心會 NEWS

## 岡山地域リハビリケアセンター 『きらり祭』

2010年11月17～19日にリハビリ倶楽部築港で第6回きらり祭が開催されました。3日間を通しての来場



者数は80名でした。毎年、ご利用者様とともに招待状を作り、ご利用者様の担当ケアマネジャーに招待状を渡しています。6回目ともなると

外部の方にも定着してきて「もうこの季節ですね」とか「今年も行っていただきます」などといった声も聞かれるようになりました。参加されたご利用者様も「このような年、今までになかったのでもよかった」、「みんなが力強く取り組んでいる姿がわかった」などきらり祭を通して新たな発見をされた方もおられました。アンケートの中にも「また来年も開催したい」と答えられたのが大多数でした。ご利用者様にそのように感じていただくことができ、スタッフもとても喜んでおり、また来年も開催したいと思います。



## 創心會 *Topics*



- 2月13日 (日) 13:00～  
特別研修会  
夢のみずうみ村代表 藤原 茂様
- 4月1日 (金) 10:00～  
平成23年度 入社式
- 4月9日 (土) 10:00～  
(株)創心會合同就職面接会 本社にて

## 編集後記

新たな1年が始まり1ヶ月が経過しました。またこのジャーナルもvol.7になり、今回の冬号で3周年を迎えます。これも皆様のご理解とご協力と感謝しております。ありがとうございます。この度の冬号も論文形式のものからコラム、各活動の報告など皆様の想いが多く詰まった作品となりました。是非、熟読していただき、それぞれの取り組みの共有や利用者様との関わり、学びの機会、そして「楽しんで働く」ことに繋が

ればと編集部一同願っております。そして執筆者の「伝えたい」想いを感じてください。

「伝える」ということに関してですが、昨年夏、私たちに感動を与えてくださったサッカー日本代表監督の岡田武史さんは「言葉を使って心を伝える」と「岡田武史というリーダー：二宮寿朗著」という本やカンブリア宮殿に出演された際におっしゃっていたのが印象的でした。私も「伝える」ということに関して慎重にし、参考にさせて頂いております。

また今後、このジャーナルも更に“しんか”していきます。是非、紹介して欲しい、書いてみたいという方がおられましたら、編集部へ連絡下さい。

編集部 波多野

---

---

書名 株式会社創心會<sup>®</sup>機関誌『2011年冬号』Vol.7

The Journal of True Care

発行者 株式会社 創心會<sup>®</sup>

〒710-1101 岡山県倉敷市茶屋町2102番地14

創刊日 2009年5月1日

発行日 2011年2月1日

定価 500円(税込)

---

---

※無断転載は固くお断りいたします。

# 心から 創から



総合ケアサービス  
株式会社 創心會®